

## 第21回 文化資源学フォーラム実施報告書

### 顔を隠す

—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生



# 目次

第1章	文化資源学と文化資源学フォーラム	
1.1	文化資源学研究室とは	2
1.2	文化資源学フォーラムとは	2
1.3	2021年度受講生	3
第2章	顔を隠す	
2.1	企画概要	4
2.2	当日発表	
2.2.1	開会挨拶 文化資源学研究室主任 小林真理教授	5
2.2.2	趣旨説明 高口葵	5
2.2.3	講演 東京大学 高岸輝准教授	8
2.2.4	講演 メディア環境学者 久保友香先生	12
2.2.5	ディスカッション	17
2.2.6	質疑応答	21
2.2.7	閉会挨拶 文化資源学研究室主任 小林真理教授	24
第3章	発表に向けた準備	
3.1	発表までのスケジュール	25
3.2	勉強会	
3.2.1	石田かおり先生 (駒沢女子大学教授)	26
3.2.2	原島博先生 (東京大学名誉教授)	26
3.2.3	高岸輝先生 (東京大学准教授)	27
3.2.4	宮永美知代先生 (東京藝術大学助教)	28
3.2.5	久保友香先生 (メディア環境学者)	28
3.3	当日に向けた準備	
3.3.1	実施方法の検討	29
3.3.2	参加者募集方法	29
3.3.3	当日に向けた打ち合わせ	30
3.4	当日の運営	
3.4.1	本番直前の準備	30
3.4.2	本番中の運営	30
3.4.3	発生したトラブル	30
3.5	反省事項	31
第4章	アンケート結果	32
第5章	フォーラムを実施して	40
付録1	ポスター	42
付録2	趣旨説明スライド資料	43
付録3	高岸先生ご講演スライド資料	46
付録4	久保先生ご講演スライド資料	50
付録5	来場者アンケート	58

# 第1章 文化資源学と文化資源学フォーラム

## 1.1 文化資源学研究室とは

文化資源学研究室は、正式名称を文化資源学研究専攻といい、東京大学大学院人文社会系研究科に属する研究専攻として2000年に発足した。文化資源学について、研究室のホームページでは次のように説明されている。

文化資源学は、人間が生み出すさまざまな文化を、既成の概念や制度にとらわれず、「ことば」と「かたち」と「おと」を手掛りに、根元に立ち返って見直そうという姿勢から生まれた。そして、その源泉に立ち返って得た知識や情報を、今度は社会に還元させることが文化経営学である。このように文化資源学は、多様な視点から文化をとらえ直し、新たな価値を発見・再評価し、それらを活かしたよりよい社会の実現をめざす方法を研究・開発しようとするものである。

文化資源学研究室は学部に対応する専修課程を持たず、修士・博士課程のみで構成されている。当初は文化経営学、形態資料学、文字資料学（文書学・文献学）で構成されていたが、2015年度より、文化資源学と文化経営学の2つのコースに再編された。社会人・外国人に対して大きく門戸を開いていることも特徴で、募集人数の半数が社会人であることから、国籍・年齢・キャリアが多様な構成員による研究室となっている。

文化資源学は領域横断的な性格を持ち、文化資源学研究室は、美学芸術学、美術史学、宗教学といった人文社会系研究科の他の研究室や、史料編纂所、総合研究博物館などの学内機関、国立西洋美術館、国立国文学研究資料館といった学外機関と協力関係にある。

## 1.2 文化資源学フォーラムとは

文化資源学フォーラムとは、文化資源学研究専攻の修士・博士課程に入学した学生によって企画・運営される公開フォーラムである。「文化資源学フォーラムの企画と実践」として、1年目の学生の必修科目となっている。規模やスタイルは自由だが、公開で行われることが条件。4月から企画テーマや運営方針の検討、勉強会などを重ね、年度内にフォーラムを開催する。様々なバックグラウンドを持つ学生が集まることを生かした多彩なテーマでの開催が特徴だ。これまで講演、パネルディスカッション、展示など様々な手法が試みられてきた。

過去に行われたフォーラムは以下の通り。

- 第1回 「文化をつくる、人をつくる：インターンシップとリカレント教育の現在」（2001年度）
- 第2回 「記憶の再生：遺跡・史跡のマネジメント」（2002年度）
- 第3回 「関東大震災と記録映画：都市の死と再生」（2003年度）
- 第4回 「文化経営を考える：オーケストラの改革・ミュージアムの未来」（2004年度）
- 第5回 「廃校の可能性—芸術創造の拠点として—」（2005年度）
- 第6回 「社会と芸術の結び目—アウトリーチ活動のこれから—」（2006年度）
- 第7回 「1000円パトロン時代—ファンによる芸術支援の現状と課題—」（2007年度）
- 第8回 「つくる、えらぶ、のこす、こわす—高度経済成長期の東京景観考—」（2008年度）
- 第9回 「めぐりゆくまなざし—発見され続ける銭湯—」（2009年度）
- 第10回 「『書棚再考』—本の集積から生まれるもの—」（2010年度）
- 第11回 「#寺カルチャー—仏教趣味のいまを視る—」（2011年度）
- 第12回 「地図×社会×未来—わたしたちの地図を探しにいこう—」（2012年度）

- 第 13 回 「酒食饗宴—うたげにつどう人と人—」(2013 年度)
- 第 14 回 「らくがき—そこにかくということ—」(2014 年度)
- 第 15 回 「キャラクター考—「刀剣男士」の魅せるもの」(2015 年度)
- 第 16 回 「2017 年のホンモノ／ニセモノ—体験を揺さぶる技術にふれてみませんか」(2016 年度)
- 第 17 回 「周年の祝祭—皇紀 2600 年・明治 100 年・明治 150 年—」(2017 年度)
- 第 18 回 「コレクションを手放す—譲渡・売却・廃棄」(2018 年度)
- 第 19 回 「富士と旅～旅メディアのこれまでこれから～」(2019 年度)
- 第 20 回 「アマビエ現象 2020—よみがえり妖怪の変容と拡散が映す現代」(2020 年度)

### 1.3 2021 年度受講生

2021 年度受講生は社会人学生 2 名を含む修士課程入学者の 6 名で構成された（社会人 1 名が後期休学）。

文化資源学コース 加藤奈月 河原有莉（社） 山内棕子  
文化経営学コース 高口葵 下條友里（社、後期休学） 森本清香

## 第2章

# 顔を隠す—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

### 2.1 企画概要

コロナ禍の今ほど、顔を隠す自分を意識させられたことはない。

マスクに半分を覆われた顔、画面越しに眺める顔が世界にあふれ、コミュニケーションの形は変容した。本年度の文化資源学フォーラムでは、このような「顔」という存在の揺らぎを出発点として、日本中世の絵巻や日本画と、現代のプリクラ、SNSの画像加工という、異なる時代の多彩な表現を比較・考察する。顔を隠すという行為が持つ意味、その背景にある個人のアイデンティティや、今という時代との関わりを紐解いていきたい。

歴史を遡ると、中世絵巻においてはあえて描かれない顔があったという。例えば神や天皇といった高貴なる存在。隠された顔はどのように表現されていたのか。あるいはその時代、物理的に顔を隠すのはどのような立場の人々だったのか。

対して現代は、化粧や撮影、画像の加工によって、見せたい顔を自在に作ることができるようになった。目を強調したり、肌を綺麗に見せたりして加工された顔は、別人のようではあるが、そのどれもが同じ顔に見える。プリクラの流行から「インスタ映え」まで、バーチャルな空間の発達は、顔を隠すことにどのように影響しているのだろうか。

顔はなぜ隠されるのか、そしてそれが晒されたときに現れるものは何か。

過去と現在を行き来しながら、描かれた顔、映された顔、そしてリアルな顔の様相を巡って、画面越しのあなたと考えてみたい。そのときあなたは、どんな顔を見せるのだろうか。

開催日時 2021年12月19日(日) 13:00～15:10

#### プログラム

第一部 13:00 開会挨拶(文化資源学専攻担当教授)

13:05 趣旨説明 学生

13:15 講演 高岸輝(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」

13:45 講演 久保友香(メディア環境学者)

「現代日本の若者たちの『顔を隠す』顔画像コミュニケーション」

第二部 14:25 ディスカッション

15:10 閉会挨拶(文化資源学専攻担当教授)

#### ゲストプロフィール

高岸 輝(たかぎし あきら)

東京大学大学院人文社会系研究科准教授。2000年、東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了。博士(美術)。専門は日本美術史。平安時代に形成された絵画様式である「やまと絵」が中世社会でどのように受容されたのかを研究する。美術作品に登場する顔の表現をAIを利用して収集・分析する「顔貌コレクション」の開発にも携わっている。著書に『室町絵巻の魔力—再生と創造の中世—』(2008年)、『中世やまと絵史論』(2020年)など。

久保 友香(くぼ ゆか)

メディア環境学者。2006年、東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了。博士(環境学)。浮世絵や美人画などの工学的な分析を経て、化粧や画像加工で自身のビジュアルを変化させる現代女性の「盛り」に着目。理想の姿を叶えるための技術を「シンデレラ・テクノロジー」と名付け、技術の発展による「盛り」の変遷やヴァーチャル空間とアイデンティティの関係について研究している。著書に『「盛り」の誕生—女の子とテクノロジーが生んだ日本の美意識—』(2019年)。

## 2.2 当日発表

### 2.2.1 開会挨拶 小林真理（文化資源学研究室主任）

皆さん、こんにちは。本日は文化資源学フォーラムにご来場頂き、誠にありがとうございます。東京大学の大学院、人文社会系研究科に文化資源学研究専攻が開設されたのが2000年になります。その次の2001年から、文化資源学として扱っていくテーマなどを広く開くフォーラムを催してきました。2006年からは文化資源学研究専攻に入学してきた学生を中心にテーマを選んでフォーラムを企画し、開催し、最終的な報告書まで作成するという授業に変わりました。学生さんたちが企画を詰めていくのですが、誰もが初めて文化資源学を学ぶ学生ばかりです。また、文化資源学研究専攻は現在、文化資源学コース、文化経営学コースに分かれており、両者を包含するような文化資源学とは何かを、苦悶しながら教員のアドバイスを受け、考え続けていきます。なかなか厳しく大変な授業なのです。

そのうえですね、昨年同様、新型コロナウイルス感染症の観点から直にあって、議論をするということができませんでした。今年も昨年同様このようなオンラインでの開催になりました。そのようななかで今回、高岸輝先生、久保友香先生のご助力を得て、本日開催の運びとなりました。今年の学生がどのようなテーマを見つけ出し、皆さんと議論の場を広く共有できるか、ご覧頂ければと思います。これをもちまして、開会の挨拶に代えさせていただきます。よろしくお願いいたします。

### 2.2.2 趣旨説明 高口葵（文化資源学研究室 修士1年）

本日は文化資源学フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。はじめに、文化資源学研究室修士1年の高口から、本フォーラムの趣旨をご説明いたします。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、この2年間、私たちの生活は変化を余儀なくされました。そのひとつが、人と直接会ったり、直接「顔」を見たりすることでしょう。人と会うときには必ずマスクをつけ、大きな会合は極力オンラインで開催するようになりました。今回の文化資源学フォーラムも、昨年に引き続き、オンラインでお送りしています。生身の「顔」に接する機会が減り、不自由になったこと、逆に自由になったこと、本日まで参加の皆様もさまざまな思いをお持ちではないでしょうか。

感染症対策のために「顔を隠す」ことが日常化した今日ですが、本フォーラムではさらに時間軸・空間軸を広くとり、今に始まったことではない「顔を隠す」という現象を捉え、考察してみたいと思います。題材は、私たちの実際の顔ではなく、絵に描かれ、写真に映された顔です。描かれ、映された「顔」は、リアルな「顔」とどれほど異なるのか？画面上で施される「顔を隠す」表現には、どのような意図があるのか？本日まで登壇いただくお二人の先生方には、中世と現代、異なる時代の「顔を隠す」表現についてお話をいただき、後半はディスカッションを通じて現代との共通点を探りつつ、話を広げていきたいと思っています。

#### 「顔」とは何か？

「顔を隠す」お話の前に、そもそも「顔」とは何か？ということを考えてみたいと思います。「顔」についての研究は、1995年に設立された世界初の顔を専門とする学会「日本顔学会」によって、他領域にわたる蓄積があります。創立者のお一人である原島博先生が「顔」の役割について整理しています。まず第一に、私たちが生命を保つために必要なのが「顔」です。顔には、呼吸するため、ものを食べるため、危険を察知するための、さまざまな器官が集まっています。さらに、表情や言葉によって気持ちを表すことから、社会生活を営む上でも重要なコミュニケーションツールといえます。また、「顔」は相手にとって一番見やすい位置にあり、その人の「証明書」として機能しています。自分が知っている人ならばその人が誰かわかりますし、知らない人でも性別や年齢には検討がつかます。顔には、その人の人生経験までも滲み出ているともいわれます。顔は、その人の感情や気分があらわれる「心の窓」でもあり感情や気分があらわれる「心の窓」でもあります。臨床の精神科医は、その人の精神状態を知るために、顔を見ることが重要だとしています。あるいは「その人」の存在そのものといえるでしょう。顔は人格そのものであり、ぞんざいに扱うことは憚られます。顔には、社会的な差別の原因になりやすい側面があることも、忘れてはならないでしょ

う。さらに、私たちは「顔」をさまざまな道具として使っています。自然な表情だけでなく、作り笑いや愛想笑いのように意識的・無意識的に顔をつくることがあります。また、「顔」には文化的な側面があり、時代や社会によってその様相は異なるといえます。美人の基準や化粧のトレンドも、時代の移り変わりがありました。

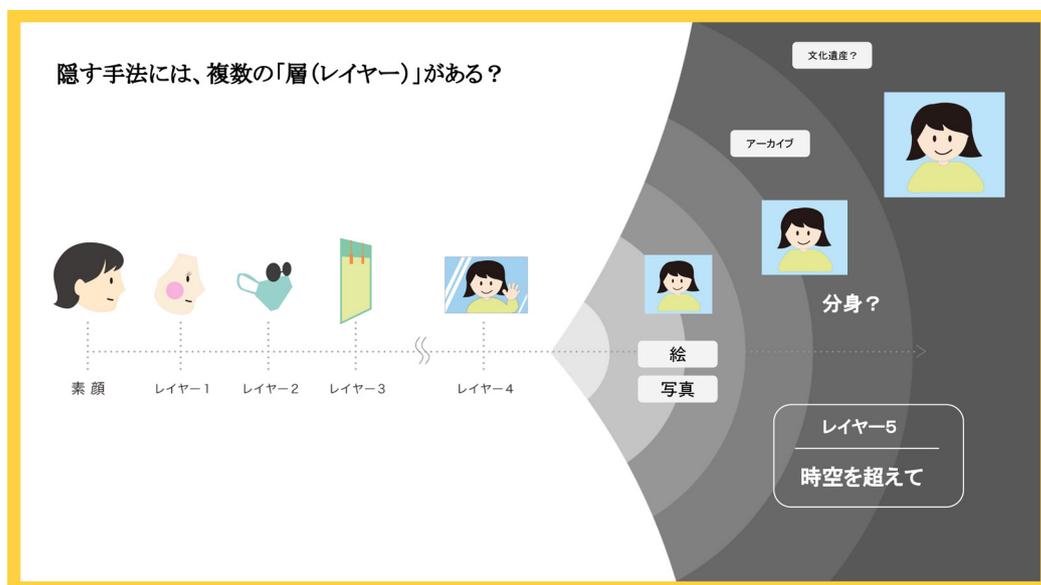
### 「顔を隠す」とは？

以上のように「顔」のさまざまな役割を踏まえると、「顔を隠す」場合においてもさまざまな理由が考えられます。私たちが現在、マスクをつけるのは、先ほどの顔の役割と照らし合わせると感染症対策という「生きるため」の必要からといえるでしょう。また、顔は「証明書」であり、個人情報ですから、特定されないようにマスクングをかけることがあります。顔は「心の窓」でもあるので、どうしても感情が顔に出てしまい、目の前の人に見られたくないときは、顔を手で覆います。「存在としての顔」でいえば、宗教上の争いでの石像の破壊を思い起こさせます。顔を打ち壊すことは「その存在そのものを消す」という強烈なメッセージになり得るでしょう。本来の顔を隠し、演出することで、自分の気持ちを上げたり、人を惹きつけたり、別の何かになりきるための「道具」として顔を用いることがあります。文化、特に信条や宗教に関わる「顔を隠す」行為で最初に思いつくのは、イスラム教のヒジャブやニカブでしょう。また、その文化圏の気質にもその特徴があらわれます。日本人は欧米の人に比べ、マスクに抵抗がないことがよくいわれます。顔の文化は、時代とともに変遷しています。特に、インターネットやSNSなど、生身の顔を見せない技術が普及した現代を、原島先生は「匿名」の「匿」と「顔」をあわせて「匿顔の時代」と名付けました。匿顔の時代、私たちはどう顔と向き合うべきか？という議論は、コロナ禍以前から、そしてコロナ禍を経てさらに注目を集めています。

以上のように、さまざまな理由による「顔を隠す」行為が考えられますが、その手法についても整理を試みたいと思います。わかりやすくご説明するために「レイヤー」、つまり1枚2枚と素顔の上に重なっていく「層」を用語として使いました。素顔からの物理的な距離、あるいは「顔を隠す」操作の順番で、レイヤー1、2、3…としていくと、レイヤー1はもっとも素顔に近い「化粧をほどこした状態」といえます。レイヤー2は、マスクやサングラス、ニカブなど、「モノによって顔の一部、または全面を隠した状態」です。（先ほどのレイヤー1、つまり化粧の上にマスクはつけられるので、レイヤー2に位置付けました。）レイヤー3は、さらに顔から遠くなり、御簾や壁など「空間的な装置によって顔を隠している状態」です。レイヤー4は、さらに「空間を超えた顔を隠す状態」、つまり遠く離れた場所と場所をつなぐ「顔を隠す」状態です。情報技術の発展によって、声だけでなく「顔」も映像で伝達できるようになりました。「生身の顔」が様々な媒介の下に隠れるという点に注目し、レイヤー4に位置付けましたが、電話からビデオ通話やZoomへ、「顔をみせる」方向に技術が展開していることは、人間にとって顔がいかに重要かを物語っています。



さらに、レイヤー5という層が考えられます。これは「空間も時間も飛び越えた「顔を隠す」状態」です。今回のフォーラムで扱う「描かれた顔・映された顔」もここに当たります。描き、映しとられた「顔」は、「その人」本人から離れますが、「分身」とはいえるかもしれません。そうした「顔」は、「その人」本人と全く繋がりのない不特定多数の人間にみられる「顔」であり、さらに蓄積、保存されることで、後世の人に評価、鑑賞される可能性があります。



描かれ、映された顔は、単純にその人の「顔」であるだけではありません。それが生成される過程には、必ず逆方向からの「まなざし」があります。絵画は、その描き手の注目するところや、その表現手法と技術によって描かれます。写真も同じく、カメラマンの目線、技術や表現によって撮影されます。現代では「自撮り」のように、自分で自分の姿を鏡でみるようにして、形に残すことが可能になりました。「その人」本人を写(映し)とって生成された「顔」は、もはや現実の「その人」と別ものであるという点で「顔を隠す」ひとつの状況をつくっています。さらに、その写しとった表現の中には、意図的に顔を描かなかったり映さななったり、あるいは隠したり、加工したりなど、そもそも顔が隠された状態で描かれ、映される場合もあります。ここにもまた、作者や被写体となった人の意識的、無意識的なものを読み取ることができそうです。

描かれた顔、映された顔は「見られること」を意識し、「見られること」によって生成された顔といえるでしょう。そこには、作者や依頼主の意図と同時に、社会の状況や価値観も反映されているといえそうです。「顔を隠す」表現をみることで、現代の顔にも新たな発見があるかもしれません。

## 2.2.3 講演 高岸輝（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

### 「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」

ご紹介ありがとうございました。東京大学の高岸と申します。それでは30分ほどお時間いただきまして、中世の絵巻を中心に見てまいりたいと思います。

私は日本の中世の美術史を主に研究しておりますが、美術史学研究室とともに文化資源学研究室も兼担しており、今日はそちらの文脈で古美術について考えてみたいと思います。今回、文化資源学の院生たちからこのテーマをいただいて、非常に時宜にかなった、しかも中世から現代へと繋がる面白いテーマだと強く感じています。

#### 美術史研究における顔

今日の全体のテーマで「表現と社会」という文言が非常に重要なと考えております。さて、われわれ美術史を研究している人間が顔に注目する理由は大きく分けると三つあると思います。一つ目は絵師や仏像を作る仏師など、絵画や彫刻の作り手の個性が最もよく表れるのが顔の表現だということです。これを様式というふうに呼びます(①)。二つ目は、人間、あるいは人の姿をした神や仏などを造形化する際に、作り手やそれを取り巻く社会が共有している約束事を知るため、ということになります。これを図像と呼んだり、あるいは形式と呼んだり、あるいは型というような言い方もできると思います(②)。

①と②が主に美術史の検討分野ということになりますが、三つ目は、その作品が作られた地域や時代の社会の中で、人間がどのような営みを行ってきたのかを知るための手がかりとして顔に注目するという考え方があります。これは民俗学、社会学あるいは絵画史料論という分野と言っていいと思います(③)。①の様式の問題に関しては、現在、人文学オープン共同利用センター(CODH)と共同で、顔貌コレクションと研究を展開しております。通称「顔コレ」と呼んでおりまして、検索していただけますと詳細を示したサイトに接続できます。IIF(トリプルアイエフ)という、最近普及しているインターネットでの画像公開の規格を活用して、世界中の美術館・博物館や図書館が公開している絵巻、絵入り本などの中から顔を切り出して、相互に比較をするという試みです。この作業を通じて、色々なことがわかります。例えば、同じ属性の人物ごとに分類する。男性、女性、武士、公家、僧侶というようなタグを付けていって、比較することができます。あるいは同じ作品の中で、あるいは異なる作品相互で顔の描き方が似ている、似ていないを検出し、そこから絵師の鑑定にも寄与することが可能です。

本日は、①の様式の問題は割愛し、②と③の問題に触れたいと思います。一つは図像・形式・型の問題、それからもう一つは民俗学・社会史・絵画史料という問題です。

#### 顔を隠す表現

日本の中世の絵巻の中には顔を隠す表現というのがしばしば出てきます。これらは大きく二つに分類できるだろうと思います。

一つは、神や天皇などの高貴な存在に対して、顔を描くことははばかるということです。これは、絵を描くときの約束事ということになります。それからもう一つ、いわゆる僧兵、正確には衆徒、大衆と呼びますが、彼らや病人などで顔を隠した覆面姿、これは実際に当時の社会の中で覆面をしていた人々を描くということです。このことは③の民俗学、社会史の問題意識とつながります。

#### 顔を隠す行為の社会的な意味

まず③の描かれた対象に注目し、その後で、美術史の取り扱う「描く行為」について話を移したいと思います。渋沢敬三という民俗学者がいました。彼が戦前から企画をあたため、戦後の1964年に出版開始されたのが『絵巻物による日本常民生活絵引』という本です。渋沢敬三というのは、現在、NHK大河ドラマで主演となっている渋沢栄一の孫にあたる人物で、実業家でしたが、民俗学者でもありました。この人物が、中世絵巻に描かれた民俗的事象を抽出し、それらを分類し解説を付したという本になります。絵巻に描かれた事物にタグを付けていったということです。その中身を見ますと、こんな具合になっています。たとえば、「春日権現験記絵巻」という鎌倉時代の絵巻の中から

人物を抽出して、そこに出てくる着物、髪型あるいは手に持っている杖などの一つ一つの名前を明らかにし、書きこんでいく。注目されるのは、覆面の女というタイトルがついたページです。ここに描かれた女性たちは、顔に袈裟を巻いて覆面をし、手には数珠を持っています。このように袈裟で覆面をするというのは基本的には僧兵すなわち衆徒と呼ばれる、寺院に所属する武装集団です。女性も同様の姿をすれば、男性社会である寺院あるいは神社に紛れ込むことができた、と述べています。顔を隠すことによって、性差を超えることができるのではないかということです。その真偽は、検討の余地がありますが、重要な指摘だと思います。次に「一遍聖絵」。時宗の開祖・一遍の人生を描いた絵巻ですが、やはり覆面の人物が出てきます。渋沢はこのように書いています。覆面をしているのは、癩者すなわちハンセン氏病を患った人たちと一般的に言われているが、物乞いをするにあたって、顔を見られることを恥じてこのような姿をしたのではないかと。絵巻の中のいわば背景あるいは添景として描かれている人物なので、判別は難しいのですが、この人物がハンセン氏病を患っているかどうかよくわからない。足や顔の皮膚をみても、症状が判明しません。これはどういった意味があるのでしょうか。渋沢による民俗学からのアプローチは、その後、日本中世史・社会史の網野善彦に受け継がれました。網野の『異形の王権』には、『絵巻物による日本常民生活絵引』の新版が刊行されたときの月報に記した文章が集められています。まず、「異類」や「異類異形」というものをまず定義をしたうえで、鎌倉時代以降に「異類」という言葉が、人間の衣装や姿形などについて否定的・差別的な意味で使われ始めることが指摘されています。ただし、彼らはただ差別されるだけではなくて、むしろ畏敬の念を持って見られる場合もあった。そういった文脈で、覆面や、先ほど示した袈裟を顔に巻いた裏頭という姿は、「異類異形」と呼ばれています。1200年代の史料を二つほど挙げておりますが、一つは春日社の記録、一つは石清水社の記録です。後者には、「面を隠し容（かたち）を改む異類の輩、社辺を横行するを停止す」（『石清水文書之一』、1285年）とある。顔を隠した異類の輩が、神社の境内や周囲をうろろするな、というわけです。鎌倉時代の寺院・神社の社会の中でこういった顔を隠す人々、特に裏頭という姿は非常に特殊な位置を持っていたことがわかります。こちらは「春日権現験記絵巻」で、1300年頃の作品ですが、奈良の春日大社に白河上皇が参詣したという、絵巻の成立から見ると200年ほど昔の話が描かれています。ズラリと公家が並んでいまして、そのなかを白河上皇が参詣し、周りに顔を隠したこの集団がいる。白河上皇は車の中におり、顔の部分が隠れているという点は、後に触れます。境内に集まった衆徒の集団は数珠を持ち、僧衣の下には甲冑を着ている者もいる。顔を包んでいるのが袈裟で、僧侶の象徴ということになります。こちらの稚児は、非常に派手な衣装を着ていて少し背が低い。先ほど、女性が裏頭をして寺に入るという話をしましたが、稚児も似た文脈でしょうね。顔を隠すことによって、裏頭の大衆と同じ集団に入ることができるということです。

次に、時宗の開祖である一遍と、その弟子である他阿という二人の祖師の布教の人生を描いた「遊行上人縁起絵巻」を見てみましょう。ここでは、尾張国の甚目寺で炊き出しをやっている場面が描かれています。室内に一遍がいます。屋外では、炊き出しをやっている集団が三つに分かれている。一つ目は、時宗の僧侶の集団です。これは自分たちの集団。二つ目の集団は世俗の人物や庶民たちが描かれています。問題はそこから少し外れて、三つ目の集団があり、彼らはハンセン氏病を患った人々と思われまふ。身分の違いによって描き方や、集団の位置を変えているということになります。三つ目の集団には、顔を隠す頭巾をかぶっている人たちがいて、手や足や顔にこの赤い痘痕（あばた）を描いていることがわかります。顔の輪郭も歪んだように描かれています。次に、同じ絵巻の中で川を渡る場面ですけれども、ここにも普通の武士の集団と、対岸に異質な集団が描かれています。彼らを見るとみんな顔を隠していて、甲冑を着ているけれども、肌を見ると斑点がある。先に述べたように、渋沢の絵引の中で指摘した別の絵巻では、物乞いをするのが恥ずかしいから顔隠していたのではないかと推論していましたが、確かに皮膚に斑点を描くというのが、ハンセン氏病の特徴として認識されていたようです。

次に、「融通念仏縁起絵巻」を見てみましょう。室町時代に写された作品ですが、主人公は平安時代に活躍した良忍という浄土系の僧侶です。ここでは、主人公が平安京の街中でさまざまな人々に念仏を勧めています。ここでも、身分別に人々が集まってきます。そして、最も低い身分の人たちが画面の下の方に描かれています。彼らは、顔に覆面をする者、足が立たなくなった者、物乞いをする者として描かれています。顔を隠すというのが身分表象と密接に関わっているということがわかります。

次に、別のパターンの覆面を見てみましょう。網野善彦『異形の王権』の中に「扇の骨の間から見る」というエッセイがあります。扇というのが、いわゆる即席の仮面になるということなのです。寺社の境内、河原、路上といった

公共の場所で異常な事態が発生し、それを見なくてはならない状況において、中世の人々は扇を使うことで、穢れを防ぐことができると考えていたようです。網野の言葉を引用すると、「突発的に起こった出来事、突如としてその場の状況を一変させるような事件を見なくてはならない状況に遭遇したときに、あるいはすでに予想されているそういう事態に自ら加わるさい、手に持った扇で面をかくし、人ならぬ存在に自分をかえる意味を、このしぐさは持っていたのではなかろうか」。

絵で見てみましょう。一遍の伝記を描いた「一遍聖絵」という別バージョンの絵巻があります。ここでは、一遍教団が京都に入り、集団で踊り念仏を行っています。牛車に乗った公家たちも見物に押し寄せ、身分が低い人たちも詰めかけて、興奮のるつぼになっています。この異常な光景を見ている人たちがいます。みんな扇で顔を隠し、骨の間からこの状況を覗き見している。異常な出来事から身を守るための、心理的なマスクということになります。

### 神仏や人物の顔を隠して描く表現

次に絵巻のなかで登場する神仏や人物の顔の部分だけを隠して描く表現を見ていきましょう。このことは、美術史家の山本陽子さんが2005年に『絵巻における神と天皇の表現』という本を書いておられます。議論は多岐にわたりますが、尊いものの姿を造形化しないというタブーは、偶像崇拜へのタブーとも絡む問題です。ユダヤ教やイスラム教などにも、そのようなタブーがあり、明治天皇の御真影に関する議論は1990年代に盛んに行われました。これに関しては、『天皇の美術史』第6巻に掲載された2017年の増野恵子さんの研究でも取り上げられていますが、明治天皇の最初の写真は隠し撮りだったと言われています。これまでの議論の中で、顔を描かない理由として伝統的に言われていたことが三つあります。一つ目は呪詛に悪用されることを防ぐため。似顔絵を描かれて、それを呪いの藁人形に使われると困るというわけです。二つ目は、あからさまに描かれることに対する嫌悪感。そして、三つめは高い身分の者を描くことに対するはばかりです。そこで、絵画を見ていきたいのですが、まずは神と仏です。平安時代には日本の神も仏像のように、造形化されています（「八幡三神坐像」薬師寺鎮守八幡宮蔵、9世紀末）。神は比較的隠れやすく、仏は比較的現れやすい、見えやすいというのが一般的です。この神像は、厨子の奥深くに収められ、滅多に開帳されなかった可能性があります。神を描くときの特殊な表現として「僧形八幡神影向図」（仁和寺蔵、13世紀後半）があります。うしろに影のように描かれているのが実は神の本体であって、手前に描かれた僧侶は仮の姿ということになります。シルエットだけで神や仏を表現する、鎌倉時代の作例です。

こちらは春日社の若宮ですが（「金剛般若波羅蜜多経」見返し絵、大東急記念文庫蔵、1273年）、ここには完全に姿が現れている。ただし周りにいる神官たちと比べると、体が異常に大きいわけです。身長は4メートルくらいあることになりそうです。こちらと同じ春日の神ですが、ここでは神の乗り物である鹿だけを表現するという方法がとられています（「春日鹿曼荼羅図」陽明文庫蔵、13世紀末）。春日の神は、現在の茨城県の鹿島から飛んできて、奈良の春日山、三笠山に降りてきたと言われています。ですから鹿島の「鹿」が乗り物で、奈良公園に多くの鹿がいるのもそのためです。ここでは神そのものは描かず、ただ乗り物と、春日山を描くことで神の存在を暗示するというような方法がとられています。一方で、神そのものを描いてしまう、というパターンもあります。こちらは南北朝時代の作品ですが、神様は鹿の上に実際に乗っています。神は一律に描かれないのではなく、描かれるケースと描かれないケースとあるということになるのでしょうか。さまざまなバリエーションの中で、「春日権現験記絵巻」の中には、しばしば春日の神が登場します。春日明神というのは実はいろんな人物に憑依します。女性に憑依することもあれば、男性貴族の姿をすることもあります。ここでは男性貴族の姿で現れますが、あえて後ろ姿で描くことで顔を見せないという方法がとられています。こちらは奇妙な場面で、興福寺で舞人が地獄見物をするという場面です。ここでも工夫をして神の顔を描かないようにしています。次も地獄の様子を見物している場面ですが、社殿の屋根に神の顔を隠しています。先ほどの高口さんの説明で言うとレイヤー3になりますか。これは香川県の瀬戸内海に面した観音寺市の琴弾八幡宮という神社で、山自体が御神体なのですが、神は煙で描かれています（「琴弾宮縁起絵」香川・観音寺蔵、14世紀初頭）。九州の宇佐八幡宮から神が瀬戸内の上空を通過して、雲のように舞い降りてきた。それを煙で表現しているというわけです。飛行機の本体を描かずに飛行機雲だけで飛行機が存在を暗示するようなやり方といえるでしょう。

次に天皇の表現も簡単に見ておきましょう。

先ほどの「融通念仏縁起絵巻」の中で、良忍が鳥羽上皇に念仏を勧める場面です。この場合は上皇の顔が御簾の中

に隠れています。面白いのが、霞というものの存在です。霞は、霧のような空気中の水分なのですが、これを活用して見えなくするわけですね。同じ絵巻の中で、同じ鳥羽上皇です。ここもやはり御簾と霞で顔を隠しています。「春日権現験記絵巻」の中の白河上皇は、顔の上半分だけをギリギリ隠すという工夫をしていました。山本陽子さんは、こういった表現を広く集めた結果、貴人が顔を隠す理由は絶対的なものではなく、相対的なものであると述べています。尊い人ほど隠されやすい。そして身分の低い人ほど具体的に描かれる。先ほどの病者などがそれにあたります。つまり高位の者ほど抽象的になる。天皇の顔というのは、抽象の極致であると指摘されています。

#### まとめ

最後に私から、この後の久保さんの話に向けて、論点を二つほど提示したいと思います。一つは単数性（個）と複数性（集団）の問題、二つ目は具象性と抽象性という問題です。これは対立する概念というよりは、グラデーションがあるというふうに考えた方がいいかもしれません。「春日権現験記絵巻」のなかで、白河上皇は具体的だけれども、顔は半分隠されている。単数で、唯一の存在であるということです。それを周りで見ている興福寺・春日社の衆徒たちというのは、集団で描かれているところに一つ大きな特徴があります。こういった複数性を示す人々というのは得てして覆面をしていることが多い。あるいは覆面をする状況、あるいは仮に顔を覆う状況というのが、集団で起こることが多いということになります。日本では現在、外出時にほぼ全員がマスクをしています。しかし海外では、マスクをほとんどしない国もある。日本だと、マスクをしていることに違和感がなく、むしろすることで集団の中に埋もれるということで、ある種の快適性があるのかもしれません。そういったことも含めて、複数性という状況で顔を覆うことが起こりやすい、という点をこのあとの議論の土台として考えてみたいと思います。時間になりましたので、私の話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

## 2.2.4 講演 久保友香（メディア環境学者）

### 「現代日本の若者たちの『顔を隠す』顔画像コミュニケーション」

私は工学系なんですけどこういった日本文化にとっても興味がもともとありまして、こういう場で高岸先生と一緒にこのような機会に参加させていただけることを大変光栄に思っております。

先ほど高口さんから原島先生の顔学の話がありましたが、原島先生がやはり工学系でありながら顔という切り口から、コミュニケーションとか文化というところを含めて研究するというところを切り開いてくださったので、私も工学系でありながら、こういった研究ができてるんだなと思っております。

さて高岸先生のお話とはまた一変して現代のお話になるんですが、私からはこういったプリクラ写真とかガラケーとかスマホで自撮りした写真における顔を隠す表現についての話をさせていただきます。

#### バーチャルな顔

まず私の興味の対象の基本構造をお話させていただきます。今まさに私がここにある物質的な私の顔ではなく、メディアを介したこの画像というか映像の上の顔で皆様とコミュニケーションさせていただいているわけですが、この状態を考えると、この今ここにある私の顔を「リアルな顔」というふうに呼ばさせていただきます。そしてメディアを介して対面したこともない方々にもたくさんお見せしているわけですがその顔を「バーチャルな顔」と呼ぶことにします。

映像の上の顔の方を「リアル」と感じるようになってきているかもしれないので、このような呼び方、そろそろ通用しなくなっているかもしれないというようなことも気になっているのですが、今日のところはこの定義でいかせていただきます。

そしてこういったリアルな顔とは別にバーチャルな顔を使って対面したこともない人ともコミュニケーションするというのが今急に日常化しているわけですが、かつてはそのようなバーチャルな顔を持つというような経験を持っているのは、芸能人のような特別な人だけでした。

それが今では誰もが、バーチャルの顔を持つようになり、そしてそれを対面したこともない人にまで、誰もが見られるというような状況になっているわけです。こういった状況になったのが日本では比較的早くて、デジタル技術の普及が始まって間もなく、1990年代半ばからこの状態が起こっていると言えます。特にメーカーが女子高生向けとか、若年女性をターゲットにこのような技術を、提供をするということが90年代半ばから行われたので、世界にも先駆けて日本の若者たちというのはこういった経験をしているというような状況になっております。そういう意味で25年以上の歴史が今あり、今日私はこの時代のお話をさせていただきます。

当初は写真という言葉が表す通り、バーチャルな顔というのはリアルな顔と、同じというか、リアルな顔を再現するものであったんですが、すぐにそれとは同じものではなく変換を加える、リアルな顔とは違うバーチャルな顔を作って、コミュニケーションするということが始まっています。

このリアルな顔とは違うバーチャルな顔を作ることを、若者達の言葉を聞いてみると「盛る」というふうに呼んでいるので、私も真似してこの「盛る」というキーワードをもとに、この行動とそれから技術を研究してまいりました。実はこの「盛る」ということは、リアルな顔を隠すということとほぼ同意と考えられるので今日のテーマにもほぼ一致するのではないかとということで、私もこの視点からお話させていただくことにします。

#### リアルな顔の隠し方

若者たちの盛るという行動を調査していくと、リアルな顔の隠し方は大きく3つに分けられます。

1つは、顔の一部を完全に隠す方法、マスキング型と呼びましょう。2つ目は顔の全体を部分的に隠す方法をフィルタリング型と呼びましょう。そして3つ目に、顔の一部を切り取る方法をトリミング型ということにします。

それぞれに対して最終的に作るものは、バーチャルな顔ではあるんですが、その手段としては画像処理やデジタル画像処理のようなバーチャルな手段もあるしそれからお化粧品とかマスクやサングラスのようなリアルな手段もあるしそれを合わせてバーチャルな顔を作っていることが多いです。

ただし、このバーチャルな顔を見るだけでは、それがバーチャルな手段で作られているのかリアルな手段で作られているのかも見分けがつかないことも多いのでこの境界というのははっきりしないという状態です。

こういった枠組みのもとに、時系列で追ってどういう顔の隠し方がされてきたのかということをご説明させていただきます。

## 第1期 1990年代

まず1990年代ですが、事の発端は1995年のプリント倶楽部、プリクラと通称呼ばれていて、プリクラというのはセガの商標なので普通名詞でいうと、プリントシール機というふうには呼びますが、ちょっとここではわかりやすいのでプリクラと呼んでしまいます。ここから始まっています。この機械は、最終的には6万台も売れるほど普及した装置になります。そして企業からこのプリクラという装置が提供されるとユーザーは自らプリ帳という手帳を用意するようになりました。

プリクラは1人であまり撮ることはなく、たいてい複数の友人と撮ることが多いのでまず、そしてプリクラというのは同じ顔がデジタルプリントによって複数印刷されるという中で、一緒に撮ったお友達とまず分けて、そしてそのうちの1枚をこのプリ帳に貼って、残ったものを交換して、その交換したのもまたプリ帳に貼って、それを持ち歩いてお友だちと会う度に見せ合うということをしたので、結局友達の友達のプリ帳でその先の友達にも顔が見られるというような、一般の若者の顔が対面したこともない人にまで見られるということがここでまず起こります。

そういった中で最初はこのプリント倶楽部という最初の機種も少し顔を加工してるんですがほとんど顔を加工してない。なのでバーチャルの顔はリアルな顔ほぼそのままだったんですが、すぐに1998年ぐらいになってくるとそこにデジタル画像処理が導入されます。こういったデジタル画像処理がどうして入ったかというのをメーカーさんに聞いてみると、プリクラがとても普及したときに、ゲームセンターなどでも簡易的なプリクラ装置のようなものができていって、ユーザーの人たちがそれを勝手にカメラを動かしたりとか照明を動かしたりとかをして、ちょっと上から撮ったりとか、光を強く白飛び気味に撮ったりしてるのを見て、そういった行動を吸い上げて、デジタル画像処理を導入したというようなことなどを聞いています。

まずそういったデジタル画像処理が入り、さらに2000年、2001年ぐらいになってくると、プロ用のストロボをたくさん焚いたような光学処理の方にも力を入れて、その後はそういったデジタル画像処理と光学処理とを組み合わせ、リアルな顔とは違うバーチャルな顔を作る装置となっていきます。

この頃作られた顔というのは例えばこういうような感じで、すごく白飛びさせたような顔を作るということがなされてきました。こういった顔を作る背景にあったのは、光学処理とデジタル画像処理とを含めてそれからお化粧品も含めてこういった顔が作られているのですが、なので、これはリアルな手段、バーチャルな手段を含めたフィルタリング型の顔の隠し方と言えるかと思います。この背景なんですがこの頃、特に渋谷などを中心に、すごく肌を焼いたりとかそれから髪を金髪にするような、いわゆるギャルというスタイルが流行っていて、でも学校の校則が厳しくてそういう外見をリアルな顔では作れないというような、人たちがリアルに見るともうちょっとおかしいぐらいに濃いお化粧品をするが、強い光学のストロボを焚いてそれから画像処理がかけられるとちょうどいいぐらいになるというようなお化粧品をしてこういう顔を作って、バーチャルにギャルスタイルのような派手な顔を作るということをやるということを始めたようです。

そうすると、右の子なんかは校則が厳しくて、髪を金髪できなかったかと思うんですけども確かにギャル風の派手な顔になれるというようなことがこの頃から行われて、この頃からバーチャルな顔では実際と違う顔を作るということが盛んに行われるようになっていきました。

この頃マスキング型もあるにはありました。まだ画像処理が入って、照明強くなったとはいってもそれほど綺麗な顔を作れるという装置ではなかったのでプリクラを使った遊びがすごく盛んに行われていて、そういった中で写真の上に落書きをたくさんしちゃうみたいな、遊びが行われ、顔が隠されることがありました。それから少しガラケーを使って、簡易的なホームページで顔写真を見せ合うようなことがそんなに盛んではないんですが始まっていて、そういう中でプロフィール写真を作るときにはお友達と2人で撮った写真を使うが、友達の写真までプロフィール写真に入れるわけにいかないという中で、スタンプでお友達の顔を隠すというようなことなどは行われていました。

## 第2期 2000年代

そして次に2000年代のお話をさせていただきます。2000年、最初に初めてのカメラ付き携帯で横に鏡がついて自撮りができるというような携帯電話 J-SH04 が発売されます。そこからガラケーを使った自撮りということが始まります。

最初のうちは、まだ自撮りができるとは言っても顔写真というか写真そのものをそんなに大量に送り合ったりするほど通信速度が速くはなかったんですが、2009年ぐらいになり、3Gを少し進化させたLTEというサービスが始まったぐらいから写真を容易に複数枚送れるようになると、こういった携帯ブログの中で顔写真をたくさん貼って見せ合うということがたくさん行われるようになってきました。

特にデコログやクルーズなどという若年女性をターゲットにした携帯ブログというのが出てきてそういう中で顔写真をたくさん貼ってみせて、その中で人気の人は一般の女子高生とか女子大生で、渋谷のようなところではなくて地方に住んでいるような方の携帯ブログに1日100万ページビューがあるようなほどのことがおこります。

この携帯ブログの中でよく現れた写真なんですけど、こういった目をすごく大きくして見せているいわゆるデカ目の写真というのが登場してきます。これなどはプリクラによる画像処理と、それからお化粧品と両方で作っているものなんですけど、なのでこれもリアルな手段とバーチャルな手段を組み合わせたフィルタリング型の顔の隠し方と言えるのではないかと考えます。それから携帯ブログの中では、カメラの角度によってズームアップして目だけを映した写真、トリミング型の顔の隠し方もたくさん出てきます。

なぜかと調べてみますと、携帯ブログの中ではアイメイクの情報交換がたくさんなされていました。そういう中で目だけを見せるというような写真がすごく広がっていたことがわかりました。

なぜ顔の中の他のパーツではなく目だったのか、調べてみると、このようにわかってきました。テレビとかにも出ていらした方ですが、ざわちんさんって覚えてらっしゃるでしょうか。彼女は口はマスクなどで隠してしまって目だけを加工することによりどんな芸能人の顔にもなれるというような写真を載せていた方なんですけど、ここにも象徴されるように目というのは、実は眼球は誰でも球ですし、その球の直径などもそんなに変わらないそうですね。実は誰もが同じような素材を持っている。その上で加工する道具というのが、つけまつげとかカラコンとかカラーコンタクトレンズ、それから目を大きく見せるのはサークルレンズと言いますがそういったものとか、それから二重まぶたのりだとか、もちろんアイラインとかアイシャドウだとか、実は加工する道具がすごくたくさんあります。

そういう中で携帯ブログの中では、そういった商品とつけまつげだとか、コンタクトレンズだとかの型番の情報をすごくやりとりしていて、同じような素材に、同じ型番の道具を使えばだいたい同じような目を作ることができてしまう、お手本を再現することができちゃう。だから目に関して、もの作りのコミュニケーションが盛んに行われていたということが言えます。

そういった目はいろいろ加工してこうやって作れるのに対して、口とか鼻なんていうのはそうそう加工ができるものではないので、このもの作りのコミュニケーションにおいては邪魔者という中で、隠されてきた様子が見られました。

## 第3期 2010年代

そして2010年代になってきますと、まず2007年にアップルからiPhoneが発表されます。ですが、最初のiPhoneというのは、いわゆるインカメラという自撮りができるカメラというのはついていなくて、それが最初に入るのは2010年発売のiPhone4からになります。これが出たことによってスマートフォンによる自撮りという時代が始まります。

そして、それと同時にSNSが普及します。特にInstagramは写真を投稿して見せ合うSNSですので、そこが顔や自分の姿を見せ合うというところの舞台になってきます。Instagramでは、いわゆるインスタ映えと呼ばれるような、顔だけではなく、お洋服だとか小物だとかロケーションなどまで含めたシーン全体で自分の外見を作るということ、そしてそれを見せ合うということが広まってきます。そこでは顔はちょっとうつぶき加減だったりとか、後ろ向いてしまったりなどで見えないような感じになっていたりします。マスキング型の顔の隠し方というのか、ちょっと分類が難しくなるんですが、それから、ズームインではなくズームアウトである意味のトリミング型で顔を見せないという方法が出てきます。ここにおいてはもう、顔のかわいい隠し方みたいな情報交換もするようになっていて、

マスク型で、モヤモヤと隠してしまうとか、こういう画像処理をするだとか、それからポーズで隠すだとか、いろんな方法で顔を隠すということ自体を楽しむようになっていっています。

去年ぐらいからは、このシーンで見せる静止画が動画になっていって、特にコロナ禍で、家の中のライフスタイルを動画で見せることが盛んになっています。そういった中ではもう顔をトリミングしてしまって見せないということが標準的になっています。最近はそういった動画を見せ合うという中から有名になる方々がいて、ここまでの話とは異なる音楽の分野ですが、うっせえわという曲でヒットして有名になったAdoさんなどは有名になったにも関わらず、顔をずっと隠し続けていて、そのような覆面シンガーなどと呼ばれるような方が今何人もいますが、テレビに出演したりするときでも、顔は隠したまま覆面のまま出るようなことなども起こっています。

## 顔の隠し方の変化

以上、時代を3期に分けて顔の隠し方をお見せしてまいりました。

どうして3期にわかれて隠し方が変化してきたのかというと、自分の外見を見せ合うメディア環境が変化したからではないかと考えています。

第1期はプリクラで撮った写真でコミュニケーションしており、プリクラは顔写真を作ることに特化した装置でしたので顔を見せ合うということが行われました。第2期はガラケーで撮った写真でコミュニケーションするようになり、ガラケーのカメラというのはとても狭い範囲しか綺麗に撮ることができなかったのもカメラを近づけて目などの写真を撮り、目を見せ合うということが行われました。

第3期は、スマートフォンで撮った写真でコミュニケーションするようになり、スマートフォンのカメラというのはとても性能が上がって、遠くからでも広い範囲を綺麗に撮れるようになったので、シーンだとかそれからさらに時間軸がついたライフスタイルの動画などを見せるようになりました。そういったどこを見せ合うかということは変化してはいますが、顔を隠すということが常に行われてきたということが分かります。

そしてそういった中でなぜ顔を隠すのでしょうか。私は「なぜ顔を隠すのか」というよりは、「なぜ盛るのか」という聞き方をしたんですが、インタビュー調査から分かってきたことをお伝えします。

## 「盛る」ことの自分らしさ

今3期に分けてお話したんですがその各時代において、こういった顔を隠すということをやってきた方々に話を聞いてみた結果をご報告します。まず「なぜ盛るのか」というふうに聞いても、なかなかすぐには皆さん答えが出てきません。そういえばなんでなんだろうというような感じで、少し困ってしまうんですが、いろんな聞き方をしているうちに、最終的に必ず出てくるのが、なぜか「自分らしくあるため」とか「個性」というような言葉でした。

自然のままの人間の顔というのは多様性があるのでそれが一番自分らしくもあり個性もあるのではないかと、隠すと個性がなくなってみんな同じような顔に見えていくと、私はそれまで考えていたのですが、その隠した顔に対して「自分らしく」「個性」という言葉が出てきたのです。不思議だな、どうしてだろうと考えるようになったのですが、なかなか答えが出てこなくて、いろいろ行動観察をしたりとかいろんな話の聞き方をしている中で、わかってきた考察をお伝えいたします。

「自分らしさ」という言葉の背景にどういう意識があるのかということを見ていくと大きく三段階に分けられると考察できました。

1段階目の意識なんですが、例えば先ほどもお見せしたようなすごい白飛びさせたような顔を作っている方々に聞くと、ギャルスタイルのようなイケてるグループに入りたかったという言葉が出てきます。そうでなくてもそれからデカ目にしていたりとかインスタ映えとかをしているような方々もやはりそういう今のトレンドのグループに入りたいたいというところがありました。

それがなぜ「自分らしさ」というと、学校とか地域とか親族とか、というような与えられた集団ではなくって、渋谷のような街だとか、インターネット上にある集団を自ら選ぶという「自分らしさ」という意味がそこにはあるのではないかと考えられます。

それから2段階目に、例えばこのデカ目をしている女の子の行動を観察しているとみんな同じように目を大きくして同じようにつけまつげをつけているのかなと思ったら、それぞれすごくカスタマイズをしていたりとかして

いることがわかってきました。つまり、みんな同じように見えてるんですが実は自分仕様のつけまつげをつけているということがわかってきたわけです。そういう言葉からわかるのは、集団内の他の人に対する「自分らしさ」という意識もあるんだということがわかってきました。

そしてさらに3段階、特にInstagramでシーンの写真、インスタ映えの写真などを載せている方々は必ず、「真似されたい」と言います。これもディズニーランドでディズニーのキャラクター風のコーディネートをしているシーンを撮るといものなんですが、最初にこの方がやったのをみんな真似して派生していくようなことがありました。

真似されたかどうかは、自分の写真がどれだけの人に保存されているのかどうかで確認します。Instagramのビジネスモードにすると保存数をチェックすることができるので、その数字を気にしていることがわかりました。自分の真似をするような集団ができるほどの「自分らしさ」を持ちたいという意識があると考えられます。

## まとめ

まとめてみますと、なぜ顔を隠すかですが、まずはある集団に属するために顔を隠すということがあり、その中の一部の人は、その集団の中で小さな差異を作るために顔を隠すということがあり、そしてその中の一部の人は、自分の顔を隠し方を真似されて新しい集団を作りたいために顔を隠すということがわかります。

そしてこれは日本の芸事とか武道でいう守破離のような美意識に近いのではないのかなと私は前から気になっております。まずは集団の型を守り、それができたら、型を破って集団の中での差異を作り、それができたら、そこから離れて新しい型を共有する集団を作るというのは、守破離に近いのではないかと考えています。

そして最後にどう顔を隠すのかということについてもお話させていただきます。うまく理想的に盛ることができる「盛れている」と若者たちは言うんですが、こういった若者たちがどういう状態が一番「盛れている」と言っているのかを、私が調べていった中でわかってきたのが、顔を加工する、ここで言うなら顔を隠すということになりますが、加工すればするほど、顔を隠せば隠すほど盛れているというわけではないということがわかってきました。

望ましいのは、どんどん加工する、どんどん顔を隠していくと、別人度が高くなり、急激にそうなるところがあるのですが、その直前ぐらいを狙っているというか、その直前ぐらいが理想的であるということがわかってきました。

以上で、この若者たちが行っている顔画像コミュニケーションの中での顔を隠すということの時代を追った経緯と、そしてなぜ顔を隠すのかということとどう顔を隠すのかということ現代のお話を報告させていただきました。以上で終わらせていただきます。

## 2.2.5 ディスカッション

加藤 それでは、時間になりましたので、これから第二部のディスカッションに入らせていただきます。ディスカッションに入る前に、先生方のご講演の内容を簡単にまとめたいと思います。日本美術史をご専門とされている高岸先生は、日本中世の絵巻から顔を隠している描写を取り上げ、被差別者や神・天皇といった顔を隠した表現をされる存在や、描き方の手法についてご講演されました。メディア環境学者として現代女性の「盛り」に注目されている久保先生は、プリクラからガラケー、スマホにおける画像加工とコミュニケーションの変遷についてご講演されました。

以上の講演内容を踏まえ、「描かれた顔・写された顔」と「顔を隠す」ことの意味について、お二人の先生方とディスカッションを行います。皆様から頂いた質問につきましても、この時間に紹介いたします。時間の都合上、全ての質問に回答することができない可能性があります。あらかじめご了承ください。

それでは、高岸先生、久保先生、高口さん、よろしくお願い致します。

高口 よろしくお願ひいたします。それでは、司会の加藤さんから引き継ぎまして、第二部のディスカッションを始めたいと思います。学生代表としてモデレーターを務めます、文化資源学研究室修士課程1年の高口です。先生方、皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本フォーラムのテーマを改めて振り返りまして、私から先生方にいくつか質問をさせていただきたいと思います。後半は参加者の皆様からいただいた質問を先生方に投げかけていきたいと思います。

今回の文化資源学フォーラムのテーマは「顔を隠す」という大きなテーマの中でも、「描かれた顔」「映された顔」に焦点を当てています。本日まで参加の皆様は、なぜ「顔を隠す」というテーマの中でも、描かれ、映された顔を扱ったのか？と疑問に思われるかもしれません。現在のコロナ禍、私たちはマスクをつけて生活することを余儀なくされています。この「コロナ禍の顔」は、私たちの生活がコロナによって大きく変化したことの象徴として、新聞記事になったり、研究会のテーマになったり、さまざまところで取り上げられています。しかし、最初の趣旨説明でご紹介しました、顔の役割のひとつである「生きるため」という役割、つまり感染症対策のための顔を隠す、という捉え方だけでは、もうそろそろ窮屈なのではないでしょうか。「顔を隠す」という意味を、文化や時代、時間軸・空間軸を広くとって捉え直すことができないだろうか？と考えたのがこのフォーラムのきっかけです。レイヤー1～5という、私たちが考えた整理の仕方でも「顔を隠す」層を整理しましたが、中でも広がりがあると思ったのが「描かれた顔」「映された顔」でした。社会や周囲の環境に「みられる」ことによって生成される、こうした「顔」は当時の価値観や時代の状況が反映されたもので、歴史的な視覚資料として大変面白いのではないかと思った次第です。

今回ご登壇を依頼させていただきました高岸先生と久保先生、お二人とも中世と現代という異なる時代、さらに理系と文系という本当に全く異領域でのセッションとなりました。それぞれ時代も異なれば状況も異なりますし、「顔を隠す」というテーマ自体、一様には言えないものだと思います。お二人の先生方にお助けいただきながら、良い時間にしていけたらと思います。最初に、お互いのご講演を聞かれてのご感想を伺えたらと思います。

高岸 たくさんメモを取りながらお聞きしたのですが、私の話とのひとつ大きな差異は、「盛り」と呼ばれる現象は、基本的に自画像に近いものだと感じました。つまり、表現する作り手とモデルとが重なる、というのがひとつポイントだと思います。日本では、絵師が意識を持って自画像を描き始めるのは、中世の終わりから近世の始めくらいなんですね。ですから、私の今日の話は自画像のない時代といえるかもしれません。人間の形を表現するという事は、他者を表現することとイコールだったわけですね。

そのこととあわせて考えると、久保さんがお話になっていた1990年代から現在までの約30年の歴史は、フィルムカメラが消滅し、写真がほぼデジタル化していく流れと重なります。フィルムカメラの時代は、自画像（セルフポートレート）はあまりないんですね。三脚を立てて撮ろうと思えば可能なので、全くないわけではないのですが。そもそもフィルムカメラは自分を写すようにできていない。そう考えると、19世

紀に写真が発明されてから 1990 年頃まではまるで中世のようで、それ以降は自画像が現れるという意味で表現者と撮影対象が一致する時代がやってきたように思いながら拝聴しました。

それから「マスキング型」「フィルタリング型」「トリミング型」の3つの分類。これは美術史において自画像を考えるときにも非常に有効な概念なんだろうなと思いました。このあたり、私の話と重なる部分もありそうなので、後ほどお聞きしたいと思います。

高口 ありがとうございます。それでは久保先生はいかがでしょう。

久保 高岸先生のお話を聞かなければ、絵を見ただけでは絶対わからないことだらけだなと思いました。もう覚えなきゃいけないことが多すぎて。たぶん、また今日の話をもつて、あの絵を見てもわからないかもしれない(笑)。天皇の姿が隠されたまま鹿だけある絵だって、先生にお話をお聞きしなければ、普通に鹿だと思ってしまうよね。袈裟で顔を隠している人も、手のぶつぶつが見えていなければ、ただかぶっている人だと思っちゃうわけだし。本当にそういった文脈や背景、先生がおっしゃる「約束事」がわかっていないと、わからないことだらけだなということを感じました。なので、当時の方々が、どう約束事を共有していたかが気になります。私がお話しさせていただいたこともかなり約束事が多くて、普通に見たらそっくりに見える女の子の顔だけれども、アイメイクの仕方がわかっている人同士で見たら差異が見える。今はインターネットなどのコミュニケーション手段がたくさんあるので、約束事を共有しやすいですが、こうしたコミュニケーション技術がなかった時代にどうやって共有していたのかなというのがとても気になります。

ありがとうございます。高岸先生にお伺いしたいんですが、当時の人たちはどのようにして集団の「約束事」、高口 集団を形成していくビジュアルの統一とそのやり方を共有していったんでしょう？そして、自画像の話もありましたが、描き手も、描く上でその人がどんな人か、その人の特徴をとらえながら描いていたと思いますが、描き手たちの間で「約束事」の共有はどのようにされていたのか、お話を伺えたらと思います。

高岸 おそらく、絵巻を鑑賞していた人たち、絵巻を注文して作らせていた人たち、そして実際に描いていた絵師たちは、ものすごく狭いサークルに生きていました。ほぼ京都盆地のなかの、せいぜい数百人というレベルです。貴族と高級な武士と僧侶と絵師たち、というサークルです。今日お見せした絵巻というのは、中世の普通の人たちは、ほとんど見たことがないわけ。そもそも絵巻というものが存在することすら、知らなかっただろうと思います。そういう意味で、絵巻の享受者は、久保さんがおっしゃったようにひとつのサークルなんです。「盛り」を共有しているサークルは、数人とか数十人とかいうサークルの場合もあるでしょうし、フォロワーが増えて数百人になる場合もあるかと思いますが、それくらいの人数なんです。つまり、実際に日常的に接触できる範囲に住んでいて、同じ時代に生きている、そんな感じです。

少し高口さんの質問とはずれるかもしれませんが、「守破離」という話も面白いなと思いました。私と久保さんの話で共通するのは、やはり「型」ということです。あるサークルのなかで共有されている「型」みたいなものがあって、その「型」を守ったり継続させていく「守」、それをずらしたり壊したり、イノベーションする「破」、「離」となると全く新しい「型」を作り上げていくということなんだと思います。サークルがある程度閉じていて狭い、ということと、その中での「型」の共有。「型」をいかに守ったり変化させたり壊したりするのか、という点が今日のお話の大きな構造かな、と思いながら聞いておりました。

久保 絵巻の中でも新しい「型」を提案してくる方々はいらっしゃるんですか？

高岸 絵巻というフォーマット自体がひとつの「型」なので、それ自体が完全に破壊されるような革新的な絵巻が突然現れるわけではないんです。基本的な形は保持しながらも少しずつ変化させていくっていう感じなので。今日の久保さんのお話しの 25 年から 30 年ぐらいの変化が、中世だと 300 年とか 400 年とかっていうぐらいのスパンで進行していると考えたら、今日の「型」の変化は中世の「型」の変化の 10 倍ぐらいのスピー

ド感がある。逆に現代の変化をスローモーションでやると中世になる。そう考えると、絵巻もやはり変化はしていることになりませぬ。

久保 顔の隠し方についても、新しい「型」が出てきているんでしょうか？

高岸 その「型」は比較的守られやすい。もっと言えば、わかりやすい「型」でもあります。天皇の顔をとりあえず隠しましょうというのは、ルールとして非常にわかりやすいわけです。ただ、新しい隠し方を考えるというのは、なかなか難しいことだと思いますが、変えやすいものと変えにくいものというような、技術的な制限はあるかもしれません。私がすごく面白いと思ったのが、カメラや携帯、iPhoneなど、テクノロジーの進化によってできることとできないことがあって、昔に比べるとできることはものすごく増えているんだけれども、その機能を全部使うわけではない。プリクラの頃にやっていたような画像の処理を今わざわざやらないってところもなるほどと思いました。技術というのは必ずしも全て使われるわけではないってことでしょかね。

高口 ありがとうございます。顔の隠し方は比較的守られやすい「型」ではないか、というお話でしたが、現代では携帯であったり、カメラであったり、いろいろな選択肢があるなかで、誰もが自分なりに顔を隠して、その隠し方で個性を表現するような現象が起こっているのかなと思いました。

おふたりのご講演では、それぞれ「顔を隠す」というテーマに対して、こう整理できるのではないかとご提示いただいていた。高岸先生は、実際の顔を隠している人とその顔を隠す表現ということで分けていらっしゃいましたし、久保先生はリアルな顔とバーチャルな顔で整理していただいていた。まず「顔を隠す表現」あるいは「バーチャルな顔」についてお話ができたと思いますが、高岸先生のお話の中で、具象性と抽象性で高貴な身分な人ほど抽象的に描かれるというお話がありました。久保先生のご講演の中でも、現在はもう完全に顔を隠した状態で自分の顔をみせずに、シーンで「盛る」というお話がありました。顔のような情報が集中する部分をあえて除いて、抽象的なものに語らせるようなことがここには通じるような気がしているんですけども。

高岸 はい。それは僕も聞いて面白いなと思ったところです。インスタの後ろの風景ですよ。ディズニーランドで撮った写真で、人物がすごく小さくて、後ろの風景でその人の人格とか、性格とか、もっと言えば自分らしさのようなものを表現するのは、神社の社殿であるとか、御神体の山みたいなもので神々の性格や神聖さ表現することと似てるような気がします。日本の神様は融通無碍で、形があるようでないようなものなのですが、誰も認識できる風景のような空間的な広がりを持ってくと遠くからでも見えるし、実際に人間もその空間の中に入れるわけです。人間の個性が風景に現れるっていうのかな。そういう見方っていうのは...これは面白いですね。

久保 そうですね。インスタ以前からそうなんです。顔を盛っていた時代も、若者たちはあまり顔を見せたくなかった様子があった。ガラケーのカメラが顔しか撮れない仕様で...つまり、小さいカメラを使って自撮りをするには、近くから撮るしかなく、仕方なく顔が写ってしまうんですね。その当時は、敢えてもっとズームインして、顔ではなく目だけを切り取って、ある意味、ここに風景を求めていたというか... (笑) 理想としては、やはり風景のようなもので表したかったんだなということを思います。そういった装置が手に入りさえすれば、そこで表していくので。古くから個性のようなものを風景で表す、山で表すということがあったというのは、とても納得するというか、若者たちの理想の中にもそこがあるような気がしますね。

高岸 個性を表現するときの風景というのも、傾向が明確にあるんじゃないでしょうか。つまり、誰もがだいたい似たような場所で撮っているんじゃないかと思います。さっきディズニーランドが出てきましたけど。誰が見てもよくわからない普通の街中の風景はあまりなくて、「映えスポット」みたいなところに収斂するという

点は、名所とか、パワースポットとである神社とかとやっぱり似たところがありますよね。

久保 実際、今の若者たちは、神社に結構行きますもんね。神社とかが、今はすごいインスタ映えスポットにもなっていて。中国の方々の写真も分析したことがありますけど、中国でも若者たちがパワースポットで写真を撮る傾向がありましたね。

高口 久保先生の「自分らしさ」というお話に、現代を生きる若者として共感してしまいました。高岸先生は描き手の目線で、久保先生は「盛り」を実践する若者の視点で、その人の個性や特徴の表出を語られたと思いますが、その「自分らしさ」の最たるものであるはずの顔を隠したり、盛ったりすることで、集団をつくり、同時にその人らしさが強調されるというのが、今回のおふたりのお話に共通するところかなと思いました。

最後に、現在に対する視点ということで、お伺いしたいのですが、今後「顔」というのはどのようになっていくと思われますか？マスクで顔を隠して生活する一方で、今日のようにオンラインでの顔のやりとりも普通になってきましたが、今後、顔や、顔を隠すという行為はどのようになっていくだろうかというお話を最後に伺いたいと思います。

久保 私まさにそこが気になっていて、高口さんもそうですが、若者たちからそのヒントが得られるのではないかと考えて観察しています。やっぱり顔は「あるもの」というよりも「つくるもの」となっていく傾向があって、この先もそれが進むのかなと考えています。特に、日本の女の子を見ていると、それがすごく早くから…自撮りして画像処理する、これを始めたのは日本がとても早くて、メーカーさんが技術を早く提供されたことと両方ではあるんですが、早く行われていました。今、それが世界中に広がりつつあるのを見ても、若者だけでなく老若男女がそうするようになってきたところからも、そちらが標準とまではないかもしれないですが、シフトしていった様子が見られますね。例えば、フランスの化粧品会社の方と以前お話したとき、日本の女の子はすごい目を加工して作るよね、でもフランス人は本来そんなこと絶対にしないっていうふうに言われたんです。すごい個人主義で、人個人として自然の自分というものをすごく大事にしているんですが、インターネットを使うようになったら急に他人と一緒に写真を撮るなど集団を持つようになって、目の前に画像処理があったらちょっと加工するようなことになっていて…日本の女の子たちにちょっと近づいてる気がするって言っていたのです。現実でのコミュニケーションだけではなくて、どちらかというところバーチャルなネット上での繋がりが主になっていくところで集団が形成され…写真に撮っている時点でもう人工的なので、ナチュラルな自分にこだわることができなくなっていってしまうんですね。情報通信技術の深化とともにバーチャルを受け入れていくことが進んでいくと、「あるもの」というより「つくるもの」ということが必然と進んでいってような気がしています。

高岸 そうなんですよ。バーチャルがだんだん普通になってくると、そのバーチャルで行われてる盛られた顔を、今度はリアルの自分に転写しようとするわけですね。本来は、主がリアルで副がバーチャルだったんだけど、サブ的なバーチャルの方がむしろその本体のリアルに影響を与えるっていう状態に今なりつつある。古い宮廷の儀式とか年中行事とか祭礼などは絵として記録されているわけなんですけど、ある時期になるとその記録した絵を実際の儀式で復元しようっていう話になる。バーチャルの情報がある種アーカイブ化されて、現実の社会に活用され、反映される。現代は、バーチャルというものが現実を変える力を強く持つようになってきている。驚くような「盛り」が出てくると、その「盛り」をそのまま再現したような人が、街中を歩いているという状況が出てくるのではないのでしょうか。これはすでに現れているかもしれないですね。

久保:リアル、バーチャルという言葉、今までこっちがリアル、あっちがバーチャルという感じで普通に使ってきましたが、その言葉の括りももしかしたらもう通用しないのかもしれないなと…今日の発表も最初迷いました。今までそれほど違和感を感じてなかったことが、なんかもう通用しなくなってるかもって思ったところからしても、今すごく変化が起きてるんだと改めて感じています。

## 2.2.6 質疑応答

### 高岸先生への質問①

久保先生の話でも守破離のお話がありましたが、これについていかがお考えですか。中世でも、そうした守破離のようなことはあったのでしょうか、改めて伺いできればと思います。

高岸 この言葉自体は、中世の本家本元で、現代まで繋がっている。例えば能とか狂言は、中世に根っこがあります。こうした芸能というのは、型で成り立っているわけですが、演者は型を守ってるだけでは駄目で、ある人が演じるある演目が個性を持ってないといけないという考え方があります。能というサークルのなかで、飛び抜けた人が出てきたり、ただ守るだけの人がいたり、というようなことが起こる。

### 高岸先生への質問②

e 国宝で公開されている絵画 280 件のうち、鼻口を覆う人が描かれているものを確認したところ、顔を覆う人のほとんどが頭の上半分（髪の毛の部分）も隠していました。唯一の例外が、「旧円満院宸殿障壁画」（17 世紀）のものでした。「顔を隠すこと」と「頭（髪の毛の部分）を隠すこと」について、もしもなにかご知見がありましたらお教えいただけないでしょうか。

高岸 髪の毛ですね、頭と髪の毛の問題。これも大変重要なことで、中世の人々にとっては、髻（もとどり）というマゲの部分は必ず烏帽子で隠さなければいけなかった。髻を見せるというのは、大変恥ずかしいことだったわけです。現在、われわれは口と鼻を隠してるのですが、中世においては髪の毛を隠すというのも、重要な社会の了解だったはずで。女性の場合も、出家して尼となって髪を切った場合には、基本的に隠しますね。

### 久保先生への質問①

自分で作る顔画像文化を的確にまとめていただき、たいへん示唆に富むお話をありがとうございました。プリクラから始まる第一期から現在の第三期まで、いずれも当人が意識する集団は日本国内、かつ、自分たちと同じ意識を共有する集団ということでしょうか。

久保 はい、これお話したかったところでもあるんですけども。確かに第 1 期は、プリクラ、プリ帳で合流できる範囲なので、学校とか地域という、お友達のお友達のお友達ぐらまで行くんですけどさすがに地域とか超えていけないのでそのぐらいのエリアでの集団ということになり、そして第 2 期と私が呼んだ、携帯ブログで繋がる場所では、そこで本当に全国に知られている人は、細かく言うと長くなってしまいますけれども、ページビューのランキングというので評価されるというシステムになっていたのですが、そこで一番の人なんかは全国的に知られていましたので、全国的な集団ができ、第 3 期になると、スマートフォン、SNS で繋がるので国境を越えて広がっています。世界全体とは言えないですけども、若者たちがすごく積極的に広げようとしている、例えば韓国とか中国とかは今すごく繋がってると思います。例えば韓国メイクとかが 5 年ぐらい前からすごくはやって、オルチャンメイクと呼ばれたりしますけれども、SNS を介してそういう韓国の女の子がする韓国のお化粧をすごく褒めたり、Google 翻訳でハングルとかを使いながら教えてという感じで近寄っていったり、でも画像のコミュニケーションなのでそんなに言葉は必要ないので、それを生かして世界とも繋がろうとしている様子が見られます。そういう国境を越えた集団を作ることは、今活発になっている。

### 久保先生への質問②

「盛る」という行動に飽きる、そういったきっかけはあるのか。「盛る」という行動はどのぐらいの年代まで広がっているのでしょうか。盛りすぎというのは具体的にどういったときなのでしょう。

久保 「盛る」の行動に飽きるというのは、「盛る」というのはやはりコミュニケーションあつての話で、そして何度もお話に出てきたのですが、やはり集団を作りたい、とくに既に与えられている学校とか地域とか家族とかというような集団とは違う別の集団を作りたいということがあり、同じ外見を作るといことで集団を形成するために盛るといことが基本的にあるので、与えられた集団ではない集団を持ちたい限り行われ、それがいらなくなったときに飽きるのかなと考えられます。なので、基本的にはやはり学生時代といか、就職とかをしてしまうとその集団に追われるので、そうなる前に時間がたっぷりあるけど学校だけじゃ嫌だとかって思っているようなそのぐらいの若者たちといのが範囲ではありました。でも、最近その辺も変化があつて、おそらく会社などで務めていても、ネット上では別の集団を持ちたいとい傾向は強い。わりと個人で仕事をされる方も増えていってし、「盛る」ことによるネット上のビジュアルコミュニケーションで繋がりを作りたいとい幅は広がっていっているのではないかなと思ひます。年齢層は広がっているのではないでしようか。特に去年からとかはやはり時間もありますので、夜も飲み会をせず家に帰ってくるとか、それどころか家で活動していたりするで、ネット上での繋がりをもちたいといのは結構老若男女広がっており、テキストのコミュニケーションなどもありますが、手軽なビジュアルコミュニケーションも増えている様子が見られています。

#### 久保先生へのコメント①

「盛り」とい現象は人間によって自然なことなのではないか。

#### 久保先生への質問③

資料としてプリクラが見られるといつ見方は既に現れているのでしようか。

久保 はいそうです。プリクラを貼ったプリ帳といのは今日ちょっとお見せしましたけれども、写真だけではなくて、プリクラは1人で撮らないのでそのコミュニケーション形態が現れますし、らくがきとい機能で写真の上に言葉も必ず合成するので流行語の変化だとか、そういうのが見られたりして。プリ帳の中にはお友達との手紙とかも挟まっていますし、雑誌とかにはない情報が含まれたすごく大事な資料だと思ひています。私個人でちょっと収集をしているのですけれども、そういった資料がもうちょっと体系立って集められたらいいなと思ひているところではあります。今はまだないですね。SHIBUYA109さんに提案して一緒にプリ帳ヒストリーとい企画をやつて、一応連載みたいなのを出したことあるんですけども。

#### 高岸先生・久保先生への質問

今回、先生がたにご講演いただいた内容は、いずれも日本のことだす。日本の絵巻であり、日本の女の子たちの顔の盛りについてでしたが、この「顔を隠す文化」は日本特有のものなのではないか。諸外国と比べていかがでしようか。

久保 ちょっと話しましたがやはり日本はその傾向があると思ひます。SNSなどでも、例えばアメリカだとやっぱりすべてを見せて経験とかを共有していきましようとい考え方が前提としてあると思ひうんですけども、日本だと全てを見せるといことはないとい。やっぱり盛つて隠すといところが見られますし、もうちょっと直接的な話だと、そうですね、先ほどフランスの話もしましたが、ナチュラルな自分といものを否定する行為になるのではないかといふうなことを言われたりしています。だけれども、見てると韓国とか中国といのは、日本の方が先にプリクラとかアプリで顔写真を加工するといことを行つたのですけれども、今はむしろ中国とかの方が技術も文化も進んでいるとい状態ぐら広がっているで、何かそこはやっぱりアジアとその他の国とはちょっと違う傾向があるといか、同じ技術を手に入れているのに違う使い方とか、開発者側も違う発展のさせ方をしてるといことが、私もとても興味深いことと思ひて見えています。けれども見ているとフランスの方でもとても盛り盛りにして顔を隠しているような写真がインスタとかで挙がっているときがあつて、でもそういう写真には結構、ハッシュタグで「Kawaii」つていう日本語がついてたりとか、「Harajuku」つて言葉がついてたりするで、どうもその時に日本の文化を意識しているようだなとい様子が見られて。だから外国にも顔を隠した人たちがいるけれどもそのときに日本文化を

やっつてると意識があるんだなというところにも興味があります。

高岸 そうですね、今日見た絵巻からは、日本特有の隠し方が見られると思います。一方、中国にしても、ヨーロッパ諸国にしても、神や皇帝を表現するときに、それぞれのやり方がありました。顔は表現されるけれども、その像自体を見えないところに置くとか、神の像を神殿の中に深くしまふとかですね。

#### 最後の質問

世界中の人が今皆マスクをしている現在の状況ですが、これをどのように捉えたら良いでしょうか。顔を隠すということは、先生方にとってはどのような意味のあることでしょうか。現在のコロナ禍で顔を隠すことを余儀なくされている毎日ですが、会場の皆さんに何か一言明るいメッセージをいただけたらと思います。

高岸 これは本当にすごく面白い質問だと思います。現在の状況というのは、おそらくやや長い時間軸で捉えた方が面白いと思っています。つまりマスクをしている人々が、たくさんいる映像などを、50年後とか100年後に見たときに、これは2020年前後ぐらいの状況だになっていうふうに、ある時代のスタイルとかある時代の型として認識されていくんじゃないのかなという気がするんですよね。この状況もいつまでも続くわけではなくて、マスクを外してもいいよという時代が来るだろうと思うんですけども、そうなったときに、何かまた新しい「型」ができてくるんじゃないかなと思います。マスクというのが、意外と心地いいということをおれわれは知ってしまったので、次の新しい「型」がここから発生していくかもしれない。現代は、マスクというものが世界をひとつのコミュニティにしているともいえるわけですから、歴史的に見たときに特異な状況として積極的に捉えたいなというふうに思いますね。

もうひとつ付け加えると、今みんながマスクしてる状況って何か嫌だな、まあ病気なので嫌なんですけども、でもこの状況もやはり大切な時間であると思ったほうがよいのかもしれない。

久保 絵巻みたいに現在の状況をやっぱり記録しておいた方がいいですねと今思いました。まず私は、マスクを仮面と読み換えてしまうので、今誰もが仮面をつけているということは、顔というのが自然物から人工物に変わっていつていることを表しているような気がしていて、そういう意味では、やはり顔コミュニケーション技術という意味では、これからまだまだ、完全にフロンティアなので、技術としてはとてもおもしろい状況だと思っています。そしてそこにおいて、日本はとても早くやっていたと思うんです。若者向けではありますが、プリクラとか自撮りとかで画像処理をして顔を変えてコミュニケーションする技術開発が早くから進められていて、そういった蓄積があるのでこれから日本の技術がリードしていける場所かもしれないなというところに期待したいなと思います。

## 2.2.7 閉会挨拶 小林真理（文化資源学研究室主任）

この話を聞いた後に顔を出すのって結構勇気がいるな、というふうにちょっと思いました。皆さま、学生たちが選び取ったテーマはいかがでしたでしょうか。今日高口さんがモデレートしているなかにもありましたけれども、最初に学生たちがテーマを選び始めたときに、割とすぐに、自分らしさとか、すっぴんであるということテーマに掲げようとしていたのですね。それが出てきた時に、そもそもそういう年代だし、まあそういうことにも悩んでいるのだろうなということにはちょっと思っていました、なんとなくその問題意識を歴史と現代の時間軸の中で問い直すことができ、先生方のお話も大変興味深く、面白く聞けたなというふうに思いました。

顔を隠すとか作るというかですね、盛るって文化が何かすごく多層的になっていけばいくほど、新たな可能性を開くとともに、中心にある自分ってのは何なのかなとか、あとは最終的に自分の何が残るのかとか、何を出して何で勝負をして、何を隠さなければならないのかというところを私自身はすごく考えさせられました。ただ最後にですね、久保先生からまだまだ発展の可能性があるのだというのを聞くと、お話の中にもありましたようにバーチャルがリアルになっていくということが起きていったとき、私はどうしたらいいんだ、というようなことを深刻に考えてしまいました。でも、学生たちが最初に、自分らしさって何だろう、と問うたところから始まり、今日ここに結実したことが分かって、指導してるものとして良かったと自画自賛しております。

それからもう1つなんですけど、私自身はあんまり自分自身が「盛る」ということをやってきたことがありませんけれども、何か積極的にお化粧とかしなくなっちゃったのっていつだったか、ちょっと考えまして、そういうことを考えたりすると、やっぱり自分らしさや自分の好みみたいなものが特定できてからだったんじゃないかなというように感じもして、何かどこでどういうふうに、ビジュアルコミュニケーションなのか、あるいはその「盛る」という行為なのか、顔を隠すってということと、離れていくってということが起きるのかなというのも、ちょっと興味深いなと思った次第です。

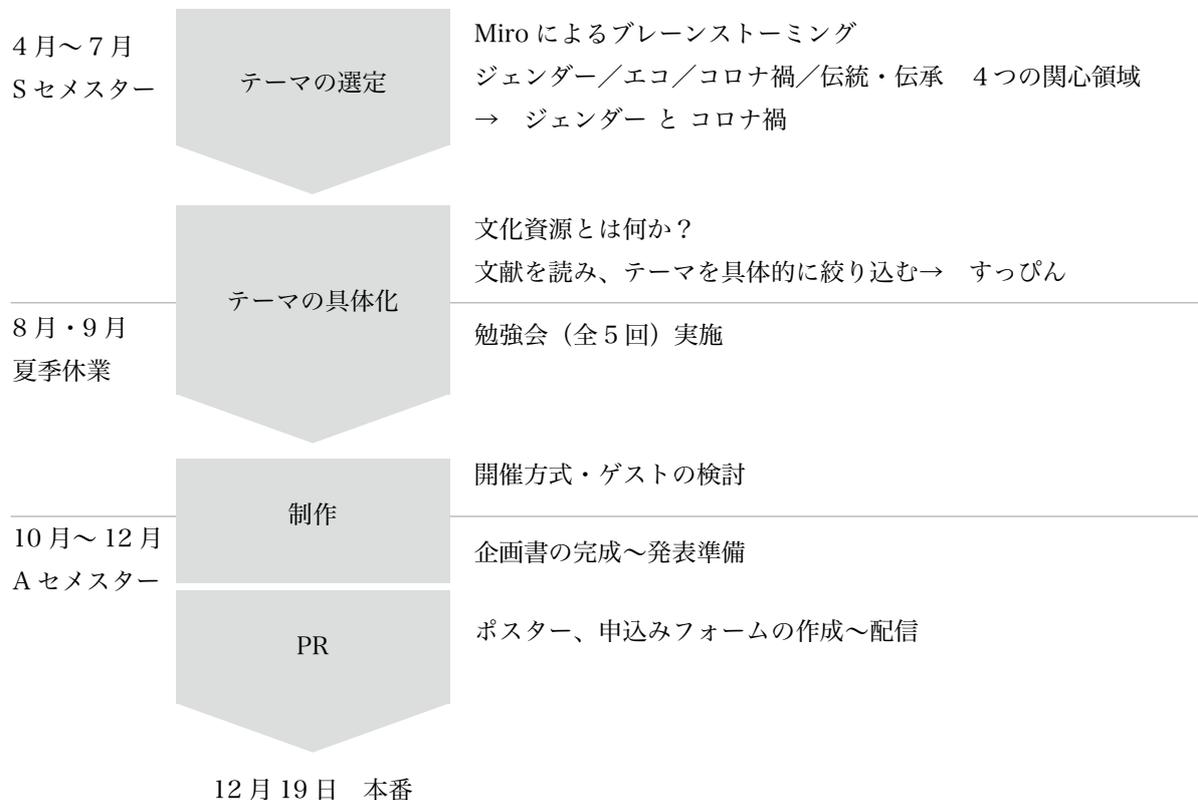
ごめんなさい、感想になっちゃいましたけれども、今回のフォーラムの開催にあたり、事前の勉強会、そして本日の興味深いご発表やディスカッションに加わって下さった高岸先生、それから久保先生、本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。

そして年末にこんな押し迫った時期に、たくさんの方々にお集まり頂き、質問などお寄せ頂きました皆さま、本当にありがとうございます。

これから私たち大学教員は入試の時期を迎えます。また新しい学生たちが来年は入学してきます。来年度の文化資源学フォーラムも楽しみにして頂いて、ぜひお越し頂きたいと思っています。そして皆さま、どうぞ良いお年をお迎えください。以上をもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

## 第3章 発表に向けた準備

### 3.1 発表までのスケジュール



前半はテーマの選定・具体化が中心となった。昨年に引き続き、オンラインでの話し合いになったため、オンラインホワイトボード Miro を活用し、各人のアイデアを可視化するように工夫した。ブレインストーミングから「ジェンダー」と「コロナ禍」に関心が集中していることがわかり、テーマの大枠を定めた。また、「文化資源」の捉え方がさまざまであったため、文献講読や議論を通じ、文化資源学フォーラムとしてのテーマの具体化を図った。ボディープジティブや #Ku Too 運動など、「ありのままの姿」に矜持を持つことが「文化資源」に通じるのではないかとという方向にまとまり、「すっぴん」がテーマ候補にあがる。しかし、企画として深めることができず、議論が一時停滞した。開催方式やゲストの検討、勉強会の準備を進めながら、再び方向性を探ることになった。

夏季休暇中に5回の勉強会を実施した。初回の勉強会で「すっぴん」や「ありのまま」の概念が問い直され、これまで議論を重ねてきた「顔」の中でも、文化的、社会的な背景から深められるとみた「隠される顔」に焦点をあてる。マスクによって隠された顔、絵画の中であえて描かれない顔、さまざまな「隠される顔」が候補に上がり、ゲストの検討と共に、文化資源学フォーラムでどのように取り上げるかを議論した。

企画が決定したのはAセメスターに入る前後である。中世と現代、描かれた顔と映された顔というゲスト2人の視点から、これからの「顔」を考える企画とした。企画書、ポスター、参加申込フォームを制作し、研究室ホームページ上で告知を開始する。学生による趣旨説明、ディスカッションについて準備を重ね、当日の運営の役割分担を行った。数回の打ち合わせ、リハーサルを経て、フォーラム当日に至る。

(文責：高口)

## 3.2 勉強会

### 3.2.1 石田かおり先生（駒沢女子大学教授）

“すっぴん”というテーマが固まり始めた8月初め、第1回目の勉強会を開催する。初回は駒沢女子大学教授の石田かおり先生にご快諾いただいた。石田先生はフッソールの現象学、そして化粧の哲学がご専門であり、資生堂在職時から化粧文化のご研究をされていた。

次の5点を中心にご教授いただく。

- ① すっぴんとは何か（学問的な定義、語源は何か。意味に変遷はあるか）
- ② 化粧の意味と時代との相関性について
- ③ 近年のナチュラルメイクの流行の背景について
- ④ コロナ禍の現在、顔や化粧を巡るコミュニケーションの変化や特徴について
- ⑤ 顔を巡る事象について、今後の見通しはどうか

以下、簡潔にまとめる。

「すっぴん」と同様の意味を持つ言葉に「素顔」があり、そちらの方が広く一般に使われ、歴史的に長いという。江戸の化粧文化（元禄、化政）まで時代を遡ってお話いただいた。当時は白い肌が外仕事をしない身分の高い人々の象徴であったり、入浴法が広まったことで肌にたいする意識が芽生えたこと等、現在の価値観とは異なる「すっぴん」を知ることができた。現在よく耳にする「すっぴん風メイク」は、いつの時代も一定の支持を得ていたという。時代によってナチュラルの定義が変わるため、化粧道具や化粧方法は変化してきたようだ。化粧は心身ともに健康であるために大切なものである一方、情報社会では、“こうあらねばならない”という他者から押し付けられた自己イメージにとらわれてしまう負の側面があることもお話しいだいた。私たちが「すっぴん」というテーマを考える起点となった、「ありのまま」という概念についても考えを深められた有意義な勉強会であった。

（文責：山内）

### 3.2.2 原島博先生（東京大学名誉教授）

日本顔学会の発起人である東京大学名誉教授の原島博先生に、2回目の勉強会をお願いした。原島先生は工学がご専門で、インターネットの普及によってコミュニケーションの様相が大きく変容した時代の在り方を、「匿顔」というキーワードで表現されている。勉強会では「コロナ時代の顔」「情報社会における顔の今後」などについて伺った。要旨は以下。

顔というのは本質的な個人情報。コロナ下の今は、マスクで顔を覆う、密を避けるなどが「ニューノーマル」などと言われることがあるが、人と真正面に向かっはいけない、ということがノーマルになるなどということは、あり得ない。古来、人間が二足歩行になって以降、集団で助け合いながら生きていくために、コミュニケーションをしっかり取るのが基本になった。単に情報のやりとりではなく気持ちを理解することが必要で、そのために重要な役割を果たしたのが顔だ。もともとは攻撃のための器官だった口が柔らかく、引っ込んで、豊かな表情や声が出せるようになった。さらに体には服を着るようになり、顔に色々な情報が集中するようになった。一番相手の見やすい部分に顔がある。顔は人間の身体の中で、今なお「裸」の部分だ。子どもの発達にも視線の高さを合わせたコミュニケーションが重要。一方で顔を隠す文化というものもある。日本では「おもてをあげい」と言われてから顔を上げるとか、イスラム女性は顔を隠していたりとか。そういうものを含めて、顔というのは面白い。私たちは人の顔を見ているようで、実は見ていない。悪い人だと思えば悪い顔に見える。自分の中でイメージを作り上げて見ている。顔というのはいつもどこか隠れているというのが本質だという面もある。仮面やマスクなど顔の一部だけ隠すということもある。顔の

上半分と下半分では役割が違うような気がする。上半分は誰であるかを識別するのに重要、下半分は表情とかコミュニケーションに必要。

ネットの普及期になって、それまで対面が当たり前だったコミュニケーションの在り方に変化が生じた。メールは文字だけのコミュニケーション、段々それが当たり前になっていった。顔学会が出来たのは1995年、インターネット元年でもある。その頃に「匿名」を提唱するようになった。顔を見せるのが当たり前ではなくなってきたから逆に、それまで取り沙汰されなかった顔の重要性に着目することになった。現代社会では写真とかSNSとか顔が氾濫しているけれど、どれも本当の顔ではない。本当の顔ではない顔に慣れてきている。逆に匿名の投書が重要というのと同じように、顔を隠すことで勇気が出るということもある。そういう点はネットも現実社会も同じなのかもしれない。

顔というのは物理的な物というだけでなく、「関係」だと思う。相手との関係によって役割が違う。美術や絵画における顔というのも面白いテーマだ。昔は宗教とも関係していた。

まず顔を巡る総論的なお話から始まり、時代の変化に伴って、顔が果たす役割や捉えられ方も変容してきたことが理解できた。また最後には美術や絵画における顔というのも面白いテーマであるという示唆も頂き、その後、企画内容について考える際の土台となるような勉強会だった。

(文責：河原)

### 3.2.3 高岸輝先生（東京大学准教授）

絵画における顔を隠す表現について考察を深めるため、文化資源学研究専攻と兼任をされている日本美術史の高岸輝先生からご指導とご助言をしていただけたことになった。

勉強会に先立ち、フォーラムの趣旨と企画書、以下の三つの質問についてお伺いしたい旨、メールで相談した。

- 顔を隠す、描かない表現について。そうした表現はどのような人物または場面に多いか
- 顔の描き方。例えば肖像画ではモデルにどの程度まで似せるか。
- 顔貌コレクションについて。顔だけを取り出して見るこの意味。

高岸先生から勉強会の快諾をいただき、9月11日の17時から、3名の学生で1時間半程度の勉強会を開催した。

メールでのやりとりの際に、高岸先生から、山本陽子先生の『絵巻における神と天皇の表現：見えぬように描く』（中央公論美術出版 2006）という著作を参考文献として提示された。勉強会当日は実際に絵を見ながら、関連する内容の文献を踏まえて、顔を隠す表現と社会との関係についてご指導とご助言を頂いた。

まず「顔を隠す、描かない表現」に関して、日本中世において顔を隠す、または描かない表現をされるのは、天皇や神様といった、非常に身分の高い人で、木の枝や御簾で隠す、影だけで表現するといったことが見られるという。こうした表現は、対象に対するはばかりだけでなく、顔や姿を描かないことで、呪いに使用されるといった悪用を防ぐという意味合いもあったという。また歌川国芳のような実在の人物で、後ろ姿のみで顔を描かない絵があることを紹介され、こうした表現は、隠すことであえて目立とうとする逆向きの自己顕示欲があるのではないかとの話だった。

次に「顔の描き方」について、肖像画は、基本的には像主のスケッチを描いて、そこに身分属性に合った胴体を貼り合わせるということをしていたという。絵描きが像主と対面するためにはある程度の身分が必要であることから、絵描きを専門とする貴族が出来たという。

こうした日本中世における事例を踏まえて、顔には、自己分身性と、その人の身分属性を固定する可能性があると考えられた。

また、絵画の話と関連して、袈裟で顔を隠す僧兵や、ハンセン病の人の顔を隠す行為についても触れられた。こうした顔を隠す行為は、社会の外側、つまりアウトサイダー的な側面もあり、現在コロナ禍で、マスクによって顔を隠すというのは、ある意味逆転現象が起こっているのではないかとのことだった。

最後に、顔貌コレクションについて話を伺った。絵画の中には何千人もの人々が登場するものもあり、また顔には描き手の癖が出やすいこと、見る側も顔の認知機能は高いことから、顔だけを取り出して比較するということがある

という。そこで顔だけを取り出してAIを利用して分析する仕組みを開発しているのだという。

高岸先生との勉強会では、日本中世における絵画表現だけではなく、当時の社会における顔を隠す行為や、それらを踏まえた現在の状況に対する考察といった、幅広い話を伺うことができた。また文化資源学研究専攻と兼任されていることもあり、フォーラムの構成に関するご助言も頂き、とても有意義な勉強会となった。後日学生で協議した結果、高岸先生をフォーラムのゲストとして呼び出すことを決定した。

(文責：加藤)

### 3.2.4 宮永美知代先生（東京藝術大学助教）

東京藝術大学美術学部にご所属の宮永美知代先生（専門：美術解剖学）が学生ミーティングにてゲスト候補の一人として上がり、お話を伺うことに決定した。宮永先生は「日本、中世の絵巻物にみる人物表現の顔を身体の表情に関する研究」をされていたことがあり、美術解剖学の視点から描かれる身体と現実の身体の接続についてご教授いただくよう考えた。

以下の点を中心にお話いただいた。

- ① 顔の2つの見方
- ② 日本の伝統絵画における顔の表現
- ③ 「リアルな顔」と「描かれる顔」の関係性、コロナ禍のマスクを付けた顔との関係性

以下、宮永先生にご教授いただいた内容を簡潔にまとめる。

絵画から読み取ることのできる顔の見方には2種類ある。1つ目は顔の内部にある頭蓋骨を見るという見方・描き方である。これはヨーロッパに伝統があり、骨格を感じられる奥行き表現と光と影が特徴的である。解剖が行われるようになってから広まった方法で、レオナルド・ダ・ヴィンチが代表的である。2つ目は顔の器官に注目する見方・描き方である。これは13世紀まで普遍的だった見方であり、目や口といった器官にこだわった比較的フラットな描き方である。ピカソは写実的な英才教育を受けていたが、ジャポニズムに影響を受け抽象画へ転向し「アビニヨンの娘たち」では、目鼻口を強調して顔を描いている。

日本の伝統絵画における顔は、基本的に線で表現され影はないものとして扱われている。喜多川歌麿の三美人図からジブリキャラクターや村上隆まで、日本では顔はフラットに表現されてきたことが分かる。

描かれた顔はモデルの分身と考えることができ、魂を持ったものだといえる。また人の存在そのものは顔に代表されるため、顔を描かない表現はあまり一般的ではない。

美術解剖学の視点から顔の見方と描き方について知識を深めることができ、「顔を隠す」という視点が絵画表現としてはマイナーであることを改めて確認できた勉強会となった。

(文責：森本)

### 3.2.5 久保友香先生（メディア環境学者）

文化資源学フォーラムは「顔を隠す」というテーマで、日本美術史の高岸輝先生をゲストに迎え、中世絵巻の顔を隠す表現についてお話を伺うことが決定した。しかし、テーマの切り口に対して、顔を描くことがメジャーな絵画、特に古代中世絵巻に題材が絞られてしまうことから、別の観点で「顔を隠す」を論じるゲストを検討することになった。

久保友香先生は、浮世絵や美人画などの工学的な分析を経て、化粧や画像加工で自身のビジュアルを変化させる現代女性の「盛り」に着目するメディア環境学者である。

以下を中心にお話を伺った。

- ① プリクラや写真加工などの「盛り」にも「顔を隠す」表現があるのか？
- ② コロナ禍における「盛り」文化の変化。
- ③ 「盛り」と「顔を隠す」の関係性。「顔」は人にとってどのような存在か？

カメラを通した外見は、リアルな外見とは別のもので、ヴァーチャルな外見である。芸能人など特定の人に限られた行為もカメラやインターネットが普及した現代では、誰もがヴァーチャルな外見を持つようになった。「盛り（もり）」は、プリクラ、ガラケー、スマホなど、デバイスの特徴を活かしながら、技術の発展とともに変遷してきた。「顔を隠す」表現は「盛り」と同義と考えておかしくはない。「マスク型」「フィルタリング型」など隠し方を分類できそうだ。

「盛り」文化にマスクの影響はあまりない。元々、口は隠される要素だった。アバター、覆面シンガーなど、リアルな自分とは異なる外見で公の場に出る場面が増えている。コロナ禍に関わらず、「盛り」は自分をデフォルメするようにして、ヴァーチャル空間へ移行している。

なぜ「盛るのか？」女の子たちにインタビューすると、「自分らしくあるため」という答えが返ってくる。盛ると顔がそっくりになるのに、「個性」がキーワードに上がる。集団の中でまずそのスタイルを習得し、徐々に自分用にカスタマイズしていく「守破離」のような過程、試行錯誤と努力で生まれた「作品」であることが分かった。外見からコミュニティを形成することで、外からは同じようにみえるが、内側からはお互いの違いがみえる。顔はもっとも情報が集まるナチュラルな部分。だからこそ、元から加工したい部分、隠したい部分だったのではないか。しかし、隠しすぎるとコミュニケーションが成り立たないので、「盛り」のような外見からコミュニティをつくる手段が有効になるのではないか。

「盛り」や「ヴァーチャル」という現代だけでなく未来に通じる視点、コミュニティとの関係性も踏まえ、なぜ顔を隠すのか考察を深められたことは有意義であった。「顔を隠す」というテーマの深め方も見えた勉強会になった。

2人のゲストを迎えることは、スケジュールやメンバーの人数を考慮すると負担が大きいという意見もあったが、「顔を隠す」というテーマをより深めるために、高岸先生、久保先生をお呼びすることとなった。

(文責：高口)

### 3.3 当日に向けた準備

#### 3.3.1 実施方法の検討

実施方法の最終確定時期（広報開始の11月）には、じきに第6波が来るとの予測がなされており、対面形式で開催という選択肢はとり得ない状況であった。しかしながら、完全なオンライン形式（ゲストも学生も自宅から参加）にするか、ハイブリッド形式（ゲストと学生が講演会場に集まり配信する）にするかについては直前まで検討した。

最終的には、各自のPCから参加する、完全なオンライン形式で実施した。

(文責：山内)

#### 3.3.2 参加者募集方法

ポスターを学生経由でデザイナーの方に制作していただき、学内での掲示とウェブ上での公開を行った。文化資源学研究室のホームページと東京大学文学部・大学院人文社会系研究科のホームページに掲載していただいたのに加え、文化資源学会のメーリングリスト、高岸先生のご協力と東大美術史学研究室のメーリングリスト、原島先生のご協力と日本顔学会のメーリングリストを通して告知をした。

参加申し込みの受付は、Google フォームを利用した。フォームでは、名前、メールアドレス（参加用 Zoom アドレス送付のため）、職業、本フォーラムを知ったきっかけ、参加しようと思った理由を尋ねた。11/19から12/18の間に120名（重複除く）からの申し込みがあった。申し込みの重複が多かったため、申し込みを受け付けた後個別に確認メールを送信すべきだったと反省している。

当日の参加用 Zoom アドレスは本番前日に一斉送信にて送付したが、申し込んでいた修士 2 年生の方々から「メールが届いていない」「迷惑メールフォルダに振り分けられている」との報告があった。この件に関する詳細は「3.4.3 発生したトラブル」をご確認いただきたい。

(文責：森本)

### 3.3.3 当日に向けた打ち合わせ

12 月 7 日 (火) 夕方の 2 時間、ゲストの先生方を入れて打ち合わせを行った。フォーラムの趣旨を改めてご説明し、学生の趣旨説明、先生方のご講演が 2 本、その後続くディスカッションの大枠を共有した。オンライン開催で起こりうるトラブルと、その対応を確認した。先生方の講演内容を簡単に共有していただいた上で、モデレーターを務める学生と登壇する先生方間で、どのように話が展開できそうか意見交換することができた。当日に向けて確認事項を共有し、本番の準備ができただけでなく、関係者どうしの交流の場になった。

(文責：高口)

## 3.4 当日の運営

### 3.4.1 本番直前の準備

当日は 10 時に本番の Zoom ミーティングに学生が集合し、最終リハーサル・通信確認、司会と発表者が使用するマイクの調整を行った。12:30 からはゲストの高岸先生、久保先生、開会・閉会挨拶を担当された小林先生も加わり、先生同士の挨拶や画面共有等の最終調整などを行い本番に備えた。

(文責：森本)

### 3.4.2 本番中の運営

13 時から予定通り開始。途中参加者の増減があったものの、関係者含め 60～70 名程が参加した。休憩時間には、LINE 通話で質問などの情報共有を行い、メール、質問フォーム、トラブル等報告フォーム、チャットの確認をした。喋っている時は他のことができないでいた。高岸先生の講演あたりから 3 分ほど時間がずれ込み、休憩を挟み 14 時 30 分から第二部開始、終了は 15 時半頃になった。運営中に、チャット入力の変換候補が画面に写るといった問題が発生し、スライドを共有している間は他の作業ができなかった。

(文責：加藤)

### 3.4.3 発生したトラブル

総括すると、フォーラムの進行に支障の出るような大きなトラブルはなかった。しかしながら、想定していなかった出来事があり、それに伴う対応には改善すべき部分が見られるため、以下に主要な三点を挙げる。

一点目は、参加者に一括送信した当日の Zoom リンクが、迷惑メールに振り分けられていたことである。研究室からの指摘を受けて判明したこの件について、個別送信にすれば解決するかもしれないと考え、当日の昼ごろ（開催 1~2 時間前）に参加者へ個別に参加案内メールを送付した。しかし同じく迷惑メールに追加されているとのことだった。フォーラムの終了後、原因を調べてみたが、具体的な解決方法を見つけることはできなかった（Zoom リンクは Gmail で件名を付けて送付している。参考まで）。Zoom リンクが迷惑メールに振り分けられる可能性があることを、参加申込の画面（Google フォーム）の最後に記載すれば、意識して探してくれるかもしれない。また、Zoom リンク送付した後、文化資源学フォーラムのホームページ上にその旨を載せることも、Zoom リンクが送られているかを知りたい参加者には有益であるだろう。しかし、フォーラムの日程を忘れてしまった参加者にたいしては、通常のメールボックスに送る以外の有効な方法がない。

二点目は、質問受付フォームをチャットに添付したものの、それを使用せずにチャットで全員宛に質問を書いた参加者がいたことである。質問受付フォームの意味をより詳しく説明する必要があったということが一つあるが、Zoom 設定の問題もあった。チャットが全員宛に送られると、個人が特定されたり進行が妨げられたりすることがある。それを防ぐため、あらかじめホストだけに送れる設定にしていた。リハーサルの時点ではうまく機能していたが、Zoom を閉じるとこの設定がリセットされることが判明した。改善策としては、ウェビナーにするか（2週間前までの申請が必要）、Zoom を立ち上げるたびに設定を変更し直すという。今回は質問受付の途中から設定を変更したものの、その後もホストあてに質問を送る参加者がいた。ただ、いたずらや冷やか等は一切なく、結果的には運営に大きな影響はなかった。

三点目は、オンライン配信のために使用していた部屋に、訪問してきた方がいたことである。そのとき手の空いていたメンバーが対応にあたり、進行を妨げたり音声が入り込んでくることなく無事に対処できた。日曜日なので関係者以外が立ち入ることを想定していなかったが、念のため部屋の鍵をかけた方がよかっただろう。

以上が主な当日のトラブルであるが、些細なところでは、趣旨説明の最中にミュートが外れた参加者がいたり、入退室の通知を OFF にできず煩わしく感じたメンバーがいたりした。前者は迅速に対応できた。後者のような表面的には見えづらい改善点は、まだまだ多く存在すると思われる、今後の課題である。これらの反省が次年度以降に生かされることを願う。

（文責：山内）

### 3.5 反省事項

準備期間全体を通しての反省点については以下だ。

まずテーマ決めに関して、時間がかかったこと。当初テーマを「すっぴん」に決めたものの、それをどのようにフォーラムで具体化するのか、切り口に行き詰まった。夏休みの間は話し合いの時間を作っても、沈黙が続くこともあった。テーマが固まっていなかったため、当然、趣旨文の完成も遅れた。趣旨文は例年7月頃には固まっているとのことで、8～9月の先生方への報告では「はっきり言って遅い」「進捗がない」という指摘を受けたこともあった。勉強会についても、依頼の時点でテーマや趣旨文が固まっておらず、むしろそでの内容をもとに趣旨を固めるための勉強会になっていて、回数も多くなった。そして結局、テーマを変えることになった。

前期の授業の頃に、先生方からは「フォーラムは全員が納得というのは難しく、『こうしたい』という熱量のある人の意見に、ある程度は引っ張られることになる」という助言を受けていたが、今年はメンバー数が少なく、その分、話し合いで皆の意向を一致させようとさせがちだったことも、時間がかかった一因と言えそうだ。

また、コロナ下での開催で、準備から開催まで全面的にオンラインだったことも影響した。一度も対面で会ったことのないメンバーもいるなか、「画面オフ」で顔出しもしなかったり、関係を深めるためのアイスブレイクも不十分だったりしたことで微妙なやりにくさがあったという声もあった。

フォーラムの切り口については、過去のフォーラムで散見される掘り下げ方が明確な、具体的なテーマ設定の仕方をしておらず、むしろテーマは抽象的で、それをどのように捉えるのか、アプローチの仕方を本番でも考え続ける形になった、というのが今年の特徴かもしれない。

ただし、テーマ決めに関し時間がかかり、最終的にテーマを変えることになったということ自体は必ずしもマイナスではなく、より時流にあった面白いテーマを吟味できたというプラスの面もあると思う。

（文責：河原）

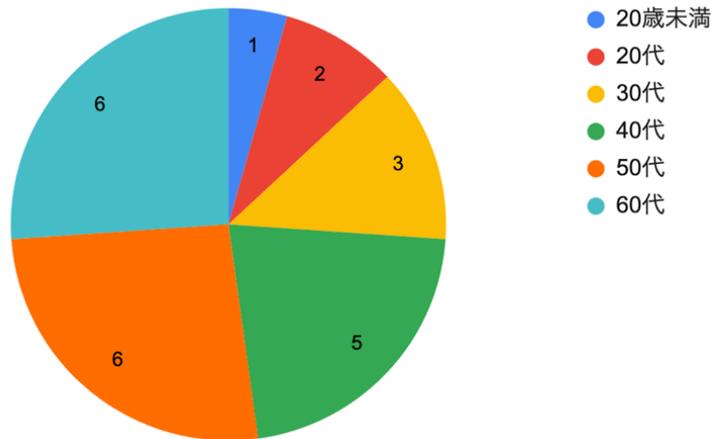
## 第4章 アンケート結果

事前参加申し込みを120名の方からいただき、当日は70名近い方に参加いただいた。フォーラム終了時に案内したGoogleフォームを使用した来場者アンケートには、24名からの回答を得た。アンケートにご協力くださった方々には、この場を借りて御礼申し上げたい。

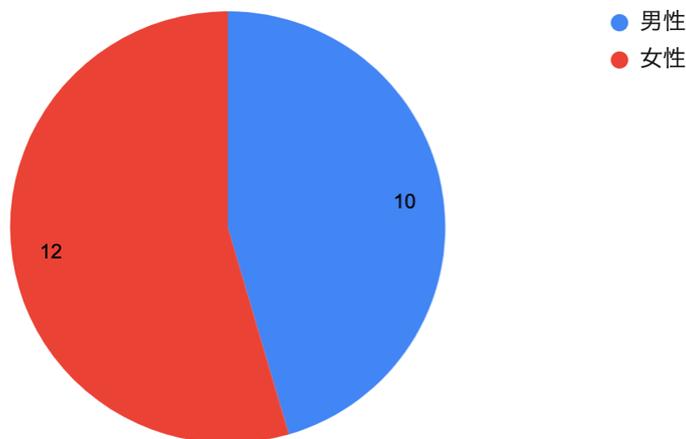
以下に24名から得た集計結果を示す図と自由記述回答の抜粋を示す。

### 1. あなたご自身について、差し支えない範囲でお答えください

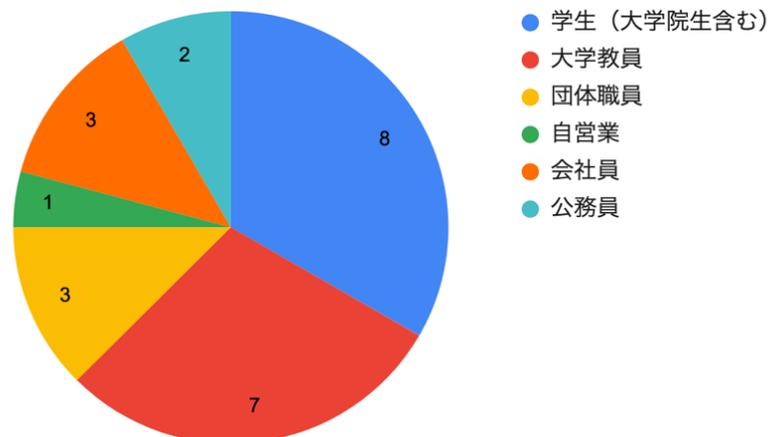
#### 1-1. 年齢（単数選択）



#### 1-2. 性別（単数選択）

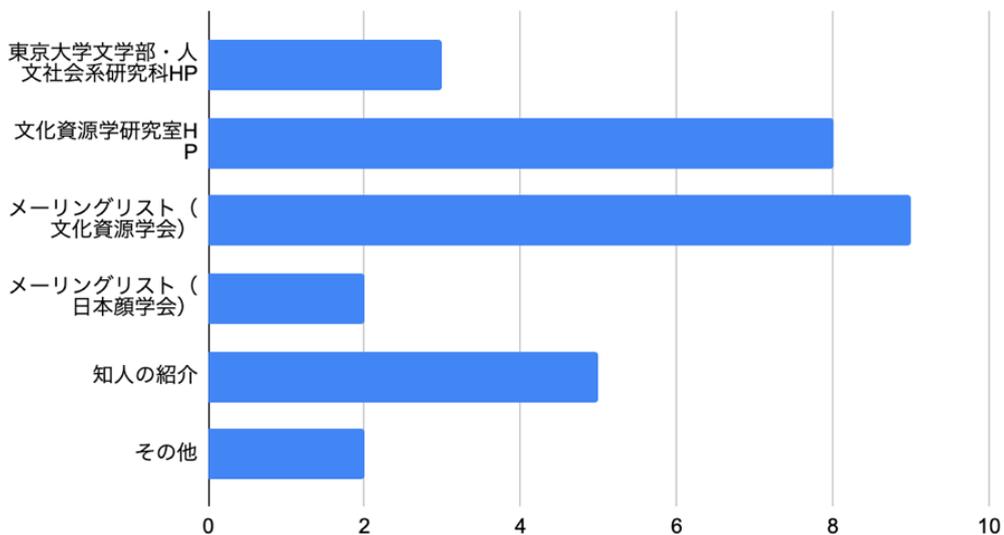


#### 1-3. 職業（単数選択）

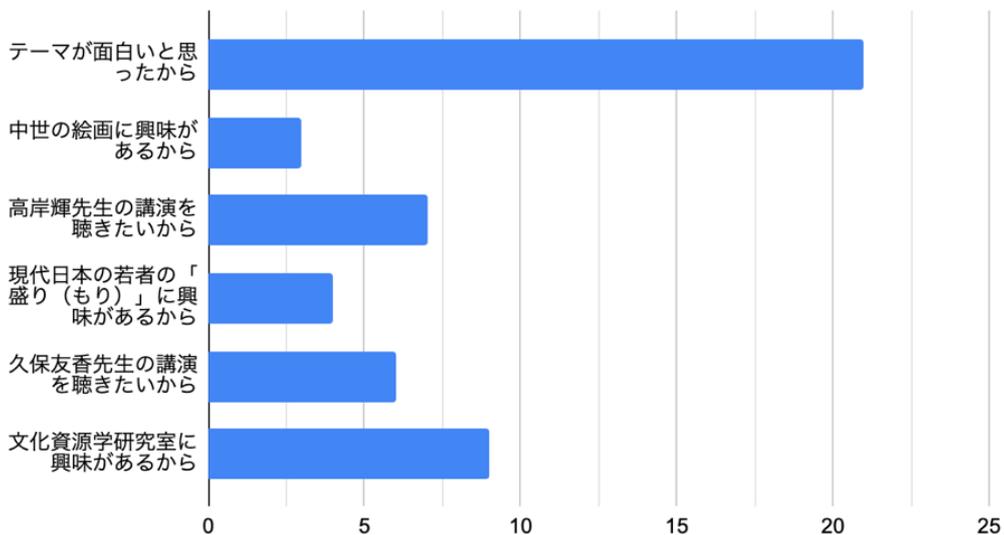


2. 本フォーラムにご参加いただいたきっかけ等についてお答えください。(複数回答可)

2-1. 本フォーラムをどのように知りましたか。(複数回答可)



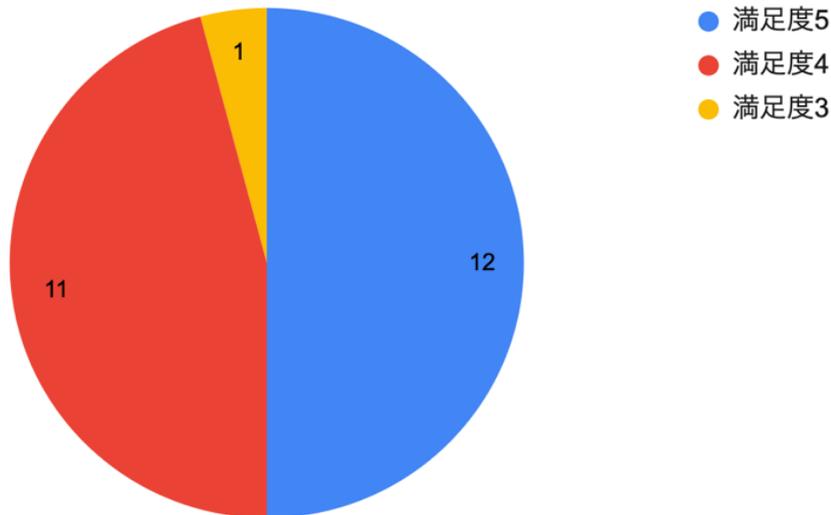
2-2. このフォーラムに参加しようと思った理由はどれですか。(複数回答可)



### 3. フォーラムの内容についてお答えください

#### 3-1. 「顔を隠す」というテーマで行われた今回のフォーラム全体の内容について、どのくらい満足されましたか。 (単数選択)

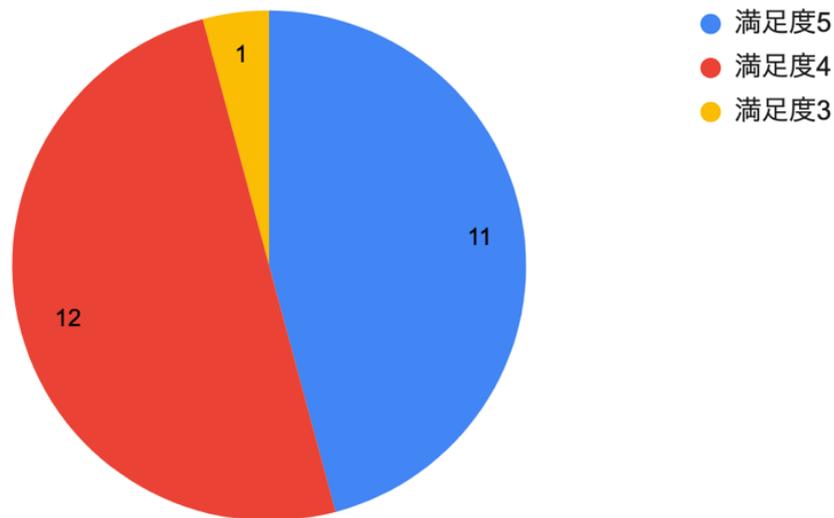
以下、満足度に関する設問は満足度 1（低い）～ 5（高い）の 5 段階から選択



#### 回答（一部抜粋）

- 高岸先生の解説付きでの絵画の紹介が非常に興味深かったです。「フィルムのカメラは自分を写すために出来ていない」というご発言も久保先生のお話とリンクして時代の移り変わりを感じました。
- 中世の顔を隠す文化をより深く理解することができました。また、「盛る」が「顔隠し」と通じるとは想像しておらず、新しい発見となりました。
- 歴史的な時間軸や世界を視野にした空間軸にも話が及び、大変興味深かったです。
- 最近はこの状況にも慣れが生じて何気なく通り過ぎがちだったマスク生活や、コロナ禍当初気になっていたリアルとバーチャルの身体性の問題に再度目を向けるきっかけとなりました。
- テーマが、必要に迫られてではありますが、今日私たちが毎日おこなっている行為を、大きな時間軸の中で捉えようとした試みが楽しかったですし、学びが大きかったです。また、扱う分野や時代が異なる先生方のお話と対談を聞くことができたこと。また両先生と学生が、この場でも学びを得ようとする真摯なご様子がとても印象的で、学ぶ機会を共有できていると満足感が得られました。
- 昨今はコロナ禍の文化に関する議論が様々な形で行われていますが、あえて表現を取り上げるという本フォーラムの方向性と、美術史と工学という異質なものを一堂に会するアプローチは新鮮だったと思います。

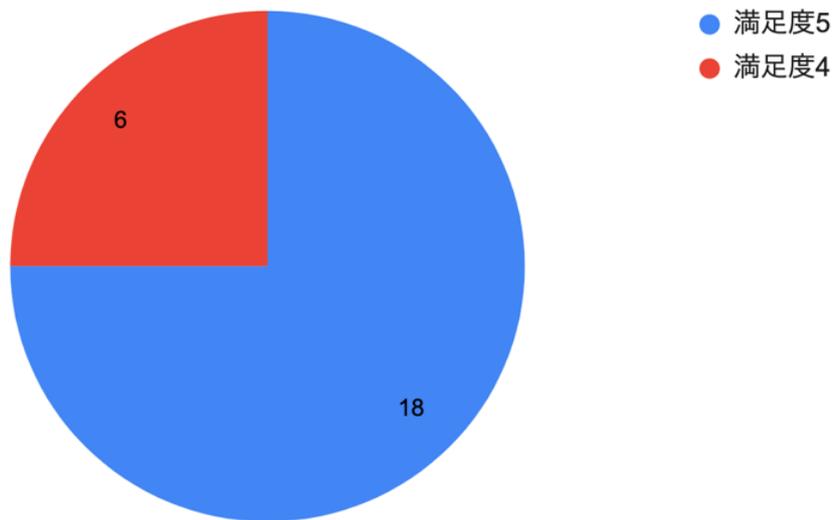
3-2. 学生による企画趣旨説明について、どのくらい満足されましたか。(単数選択)



回答 (一部抜粋)

- マスク生活のいま、それを直接取り扱わず、画像の話題に少し違和感を抱いて参加しましたが、なぜ画像なのかという説明があつて疑問が解消したから。
- 顔を「隠す」のレイヤーの第一段階に化粧が置かれているが、メイクと表現されることからすれば、これは顔を「作る」行為と捉えられるのでは。整形、刺青も「見せる」ことを前提とする。これらは「創造・改変」によって身体を拡張する行為であつて「隠す」と同列に扱えないのではないか。
- 両先生の講演を聞く上で共有しておくといふ枠組を事前に提示されていた点で、導入として分かり易く、その後のディスカッションにも生きていたと思います。

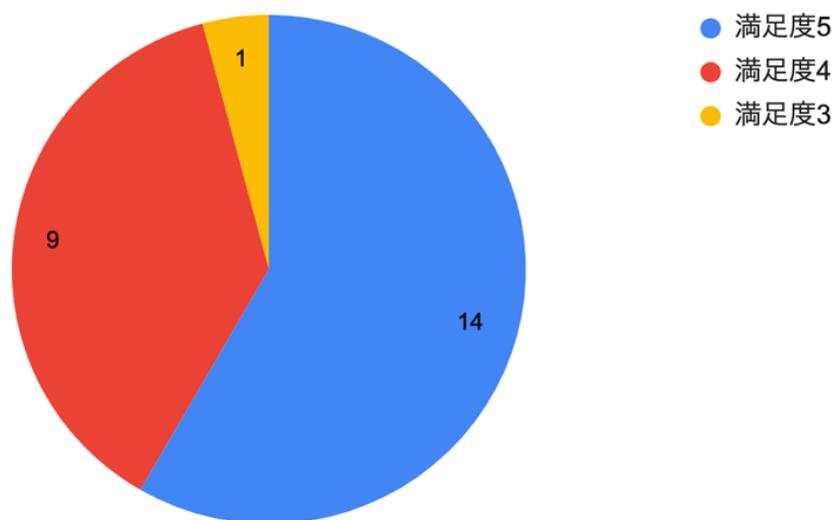
3-3. 高岸輝氏講演「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」について、どのくらい満足されましたか。(単数選択)



回答 (一部抜粋)

- 顔を隠すという行為と、顔を表すという行為は一体であるように思うので、本日のご講演を参考にして引き続き顔を隠す・表すという行為について考えてみたいと思う。特に「技術」と「型」という事が、大きなキーワードになるのではないか、と感じた。
- 貴人の抽象性を高めるために顔を描かないという日本の絵画表象がよく理解できた。今上天皇や上皇は勿論テレビなどで顔が知られているが、それでも宮内庁から公式に発表される写真では容貌を抽象化する（限りなく平準化する）ための一定の工夫がこらされていると感じる。そうした点についても聞いてみたかった。
- 美術を見る上で普段はあまり焦点の当たらない印象のある「描かれない形で描かれる存在」を取り上げていること、またテキストの記述と絵画表現の結び付けがなされていたことで、絵の見方やそこから読み取れる社会の姿について認識を改める機会になりました。

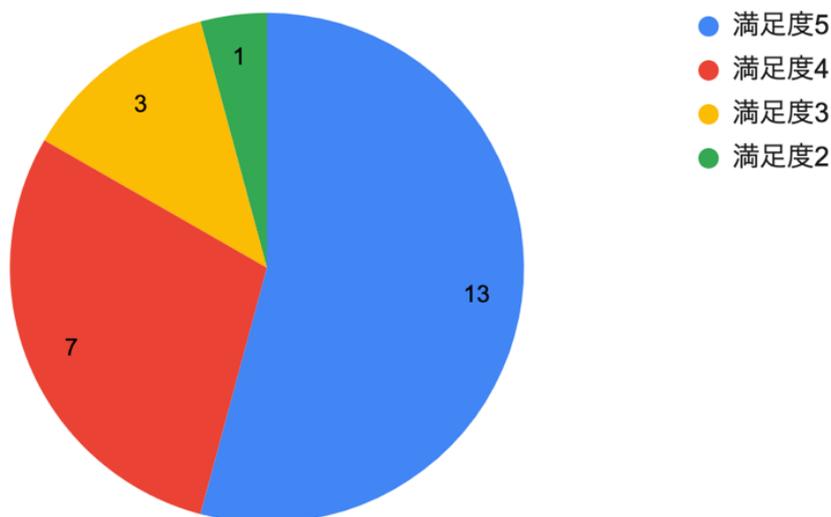
3-4. 久保友香氏講演「現代日本の若者たちの『顔を隠す』顔画像コミュニケーション」について、どのくらい満足されましたか。(単数選択)



回答（一部抜粋）

- 「自分らしさ」という考え方の変化や表現の仕方の変化に非常に関心を持った。今後、アバターなども作られている事であろうし、「自分らしさ」とその表現がどのように変化していくのか、非常に興味のあるところである。
- プリクラ以降の顔加工が、根底に「自分らしさ」を表す意識があるというご報告とその分析が興味深かったです。自己の表出において高年齢になると粉飾したくなる傾向があると了解していましたが、すでに現代のコミュニケーションはヴァーチャルでの「自分らしさ」を表出なくして成立しないということは考えさせられました。
- 久保先生の「盛る」と「隠す」は別概念のように思われました。集団に寄せる「加工」、集団において突出するために「加工」が重視されていて、集団に於ける差異を隠蔽して減じる方向には意識は向けられていないように受け取られたということです。「隠す」行為から独立した事象としてこれらは存在するよう感じられました。
- 同時代を生きていながら十分に見えていなかった社会現象と表現についての紹介と分析で、とても興味深く拝聴しました。技術的な条件の成立と同時に、それを使いこなすことでそれぞれの生まれ持った顔を超える自由が実現するということを実感しました。その今後の展開も気になるところです。

3-5. ディスカッションについて、どのくらい満足されましたか。(単数選択)

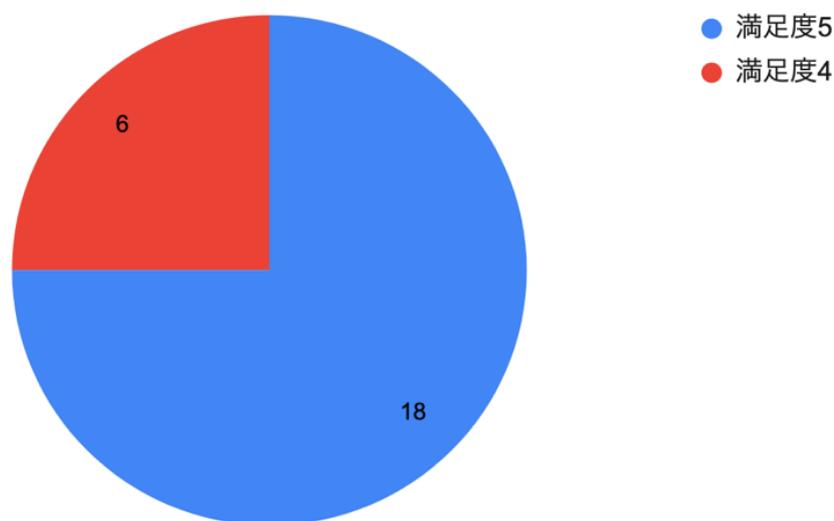


回答（一部抜粋）

- 長く準備されてきた学生の方々がもっといろいろな発言をされてもよかったように思います。先生方にお話をうかがうという形になっていたのはもったいないと思いました。
- 基本的な運営はしっかりできていて、問題は全くないと思いますが、今回の場合は上記の通り、基調講演をされた先生方がもう少し自由に話せるようになったらよかったのではないかと感じたから。
- ご発表の中にはあまり出てこなかった「型」や「集団」の問題などが、より深められたいいディスカッションで、聞いていて大変刺激を受けた。
- 研究分野の異なる先生方が同じテーマに臨むことの現場に立ち会うようなワクワク感がありました。
- それぞれの先生方の立場と今回のシンポジウムの問題意識を繋ごうという意識が見える、よいディスカッションだったと感じます。異質な研究対象や立場の共通理解の場を作ることで、今後の新たな議論の対象や論点の可能性が見えていたと思います。

#### 4. フォーラムの運営について

オンラインでの開催にはどのくらい満足されましたか。(単数選択)



回答（一部抜粋）

- 遠方地からでも参加できたのでオンラインでの開催が非常にありがたかったです。
- 対面でもいいとも思うが、今日は「顔を隠す」というテーマであったので、それに相応しい形式であったのではないかと思う。
- 会場での参加がよいのはもちろんですが、今回は時間の調節がむつかしく、オンラインでありがたかったです。登壇者の表情、資料を人影で遮られずに拝見できるのもありがたいことのひとつです。

#### 5. フォーラム全体について

フォーラム全体を通してのご感想、ご意見がございましたらご記入ください。

回答（一部抜粋）

- 学会などでは議論することのない異分野の先生方を組み合わせることで、新しい発見があって、その点が大いに評価できると思いました。テーマを「アイデンティティと顔の画像表現」にして、同じメンバーで実施したら、明確な論点が浮かび上がってもっと良くなったかもしれないと思いました。またの機会がありましたらお考えください。
- タイムリーかつ文化資源学らしいテーマで大変興味深く拝聴いたしました。文化資源学研究室ならではの視点と知恵の厚みを感じました。ありがとうございました。
- 日本では、顔を隠す文化が好まれる理由として、日本人の信仰心にも関係しているのではないかとと思われるが、その点についても知りたかった。
- 学生の発案でのテーマ設定だけあり、アクチュアルな問題を掘りこめていると感じた。今後もこうした活動を続けて欲しい。

## 第5章 フォーラムを実施して

### 謝辞

本フォーラムの開催にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

東京大学大学院人文社会系研究科教授の高岸輝先生、メディア環境学者の久保友香先生には、「顔を隠す」というテーマについて、それぞれのご専門からご教授いただいたのみならず、当日のご登壇も快諾してくださり、実り豊かなフォーラムにさせていただきました。厚く感謝申し上げます。

駒沢女子大学人間総合学群教授の石田かおり先生には、「すっぴん」というテーマについて、化粧の哲学の見地から数々の貴重なお話を賜り、私たちの関心を深めていただきました。ここに感謝の意を表します。

日本顔学会の発起人で東京大学名誉教授の原島博先生には、「匿顔」というキーワードを軸に、現在の顔とコミュニケーションについて重要な示唆を賜りました。深く感謝いたします。

東京藝術大学美術学部助教の宮永美知代先生には、美術解剖学の観点から、顔の絵画表現と現実の顔の関係についてご教授いただき、「顔を隠す」というテーマを深めることが出来ました。心からの感謝を申し上げます。

「文化資源学フォーラムの企画と実践」の担当教員でいらっしゃる小林真理先生、中村雄祐先生、松田陽先生、野村悠里先生、鄭仁善先生、ベルクマン先生、そしてTAの強谷幸平さんには、毎回の確なご指導を賜り、進捗が遅いときには温かい言葉で励ましていただきました。本当にありがとうございました。

### 加藤奈月

私はこのフォーラムを通じて、「顔を隠す」という行為の様々な側面を知り、その奥深さを実感しました。計画から実行までオンラインで行い、手探りだった部分もありましたが、皆と協力してフォーラムを完成させたことは、自信にも繋がりました。何より無事に終わって良かったです。いつか対面で「顔を晒して」会える日が来るのを楽しみにしています。

### 河原有莉

今回のフォーラムは昨年に引き続き、新型コロナ下での開催で、メンバーは全員女性で、直接会ったことはなくオンラインでの準備、という状況でした。当初決めたテーマは「すっぴん」でしたが、切り口が定まらず、皆で興味・関心を掘り下げていって…テーマを「顔を隠す」に変更した時が、1番のターニングポイントだったと思います。この先行き不透明な時代を、こんな切り口から眺められるのか！そんな気付きや驚きを、「顔が見えない」画面越しの皆様とも共有できていたとしたら、望外の喜びです。

### 高口葵

過去を振り返るのは苦手です。自分の見境なく突っ走る性格や未熟さに居た堪れなくなったり、後悔したり…でも、あのときは全力で、どうしたら面白いフォーラムになるか、緊張や不安の中でずっと考えていました。例年と毛色の違うフォーラムだったかもしれません。「観客とともに作りあげていくフォーラム」「何かしら持ち帰っていただけるようなフォーラム」を目指しましたが、どうでしたでしょうか？自己主張の激しい私の意見を汲み取ってくれたり、突き放してくれたり、共にフォーラムを作り上げた仲間感謝しています。準備段階から多くのご助言、ご支援を賜りました文化資源学研究室の先生方、強谷さん、そして「顔を隠す」というテーマに素晴らしいご講演を投じてくださり、ディスカッション中、何度も助け舟を出してくださった高岸先生、久保先生、誠にありがとうございました。皆様に支えられて作り上げたフォーラムです。深く感謝申し上げます。

### 森本清香

初対面の同期たちとすべてオンラインでのミーティングで作上げた今年のフォーラム。オンラインのメリット、デメリットどちらも経験しながら試行錯誤して本番までたどり着き、報告書を出せたことに一安心しています。今回のフォーラムの経験はきっと様々な場面で生きてくるだろうと思っています。

最後になりましたが、的確なアドバイスをくださった先生方や先輩方、そして高岸先生と久保先生をはじめとするご協力いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

### 山内棕子

テーマ決めが難航し、なかなか具体的な事柄に話が進まないなか、例年よりも少ない人数で準備するのはとても大変でした。しかし振り返ってみると、テーマ決定が遅かった分、今回の"顔を隠す"に関係なく幅広く資料を探して読み、議論する時間を持てたのは良かったと感じます。皆が初対面で、オンラインでの話し合いはお互いに手探り状態だったけれど、たまに素の姿で話していると感じられたときは嬉しかったです。

来年度は是非対面で会いたいですね。

# 顔はなぜ隠されるのか、そして

それが晒された時に現れるものは何か

顔を隠すー日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

## 第一部

「日本中世における顔を隠す表現とその意味ー絵巻を素材としてー」  
講演者 | 高岸 輝 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

「現代日本の若者たちの“顔を隠す”顔画像コミュニケーション」  
講演者 | 久保 友香 (メディア環境学者)

## 第二部

ディスカッション

コロナ禍の今ほど、顔を隠す自分を意識させられたことはない。本年度の文化資源学フォーラムでは日本中世の絵巻や現代の SNS の画像加工といった異なる時代の色々な「顔を隠す」表現について考察する。描かれた顔、映された顔、そしてリアルな顔の様相を巡って、画面越しのあなたと考えてみたい。

第21回文化資源学フォーラム

ZOOM開催・要申込

2021.12.19 SUN 13:00-15:10

主催 | 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室

企画運営 | 「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生

後援 | 文化資源学会

お問い合わせ | [bunkashigenforum.2021@gmail.com](mailto:bunkashigenforum.2021@gmail.com) 2021年度文化資源学フォーラム事務局

お申込みフォームはこちら→



付録2 趣旨説明スライド資料

文化資源学フォーラム2021  
顔を隠す—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

13:00 開始予定  
しばらくお待ちください

主催者からのお願い

- 録音・録画、スクリーンショットはご遠慮ください。  
※主催者は記録のため画面録画をしておりますが、録音・録画資料の外部への公開はいたしません。
- 画面や音声に何か不具合等がございましたら、チャットやメール (bunkashigenforum.2021@gmail.com) 接続トラブル等報告フォームにて運営事務局までお知らせください。

接続トラブル等報告フォーム



第21回 文化資源学フォーラム

顔を隠す  
日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

2021年12月19日(日)13:00~15:10

企画運営 「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生  
加藤奈月、河原有莉、高口英、森本清香、山内捺子

主催 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室  
後援 文化資源学会



録音・録画・スクリーンショットはご遠慮ください



画面や音声に何か不具合等がございましたら、チャットやメール、もしくは接続トラブル等報告フォームにて運営事務局までお知らせください。

運営事務局:bunkashigenforum.2021@gmail.com



Q&A

質問を随時募集しております。  
右の質問フォームをご利用ください。

質問 フォーム

プログラム

開会挨拶

第一部 趣旨説明

講演 高岸輝(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)  
「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」

講演 久保友香(メディア環境学者)  
「現代日本の若者たちの『顔を隠す』顔画像コミュニケーション」

～休憩・質問受付～

第二部 ディスカッション

閉会挨拶

開会挨拶

文化資源学研究室主任 小林真理

御礼

石田かおり先生(駒沢女子大学教授 被服環境学)  
原島博先生(東京大学名誉教授 コミュニケーション工学)  
宮永美知代先生(東京藝術大学助教 美術解剖学)

企画の立案にあたり、多大なるご指導を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。

本フォーラムの趣旨について

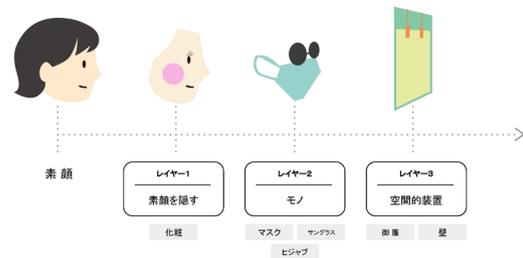
文化資源学研究室 修士課程1年 高口葵



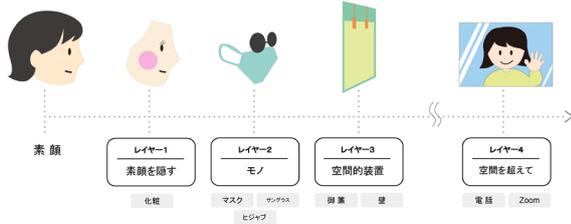
匿顔の時代



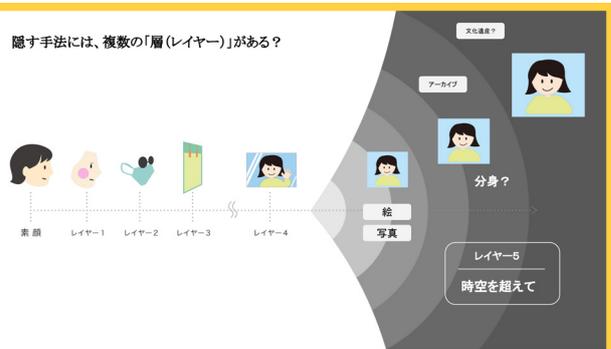
隠す手法には、複数の「層(レイヤー)」がある？



隠す手法には、複数の「層(レイヤー)」がある？



隠す手法には、複数の「層(レイヤー)」がある？



描き手

生成



自撮り

生成

見られること を意識し、 見られること で生成された顔



第21回 文化資源学フォーラム

顔を隠す—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

講演

演題

日本中世における顔を隠す表現とその意味  
—絵巻を素材として—

高岸輝 東京大学人文社会系研究科准教授

東京大学大学院人文社会系研究科准教授。2000年、東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻修士後期課程修了。博士(美術)。専門は日本美術史。平安時代に形成された絵巻様式である「やまと絵」が中世社会でどのように受容されたのかを研究する。美術作品に登場する顔の表現をAIを利用して収集・分析する「顔顔コレクション」の開発にも携わっている。著書に『室町絵巻の魔力—再生と創造の中世—』(2008年)、『中世やまと絵史論』(2020年)など。

講演

演題

現代日本の若者たちの『顔を隠す』  
顔画像コミュニケーション

久保友香 メディア環境学者

メディア環境学者。2006年、東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了。博士(環境学)。浮世絵や美人画などの工学的な分析を経て、化粧や画像加工で自身のデジタルを美化させる現代女性の「盛り」に着目。理想の姿を叶えるための技術を「シンデレラテクノロジー」と名付け、技術の発展による「盛り」の変遷やヴァーチャル空間とアイデンティティの関係について研究している。著書に『盛りの誕生—女の子とテクノロジーが生んだ日本の美意識—』(2019年)。

第一部  
終了

休憩(10分)



録音・録画・スクリーンショット等のご遠慮ください。  
休憩中に質問を募集しております。右の質問フォームをご利用ください。  
チャットにもリンクをお送りします。



質問フォーム

第二部

ディスカッション

高岸先生 × 久保先生  
司会 高口葵

第21回 文化資源学フォーラム

顔を隠す  
日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

ご静聴ありがとうございました。  
アンケートへのご協力をお願い致します。

企画運営 「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生  
加藤奈月、河原有莉、高口葵、森本清香、山内榛子  
主催 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室  
後援 文化資源学会

アンケートに  
ご協力ください▶



第2 | 即文化資源学フォーラム「顔を隠す—日本中世の伝説と現代の戦いを異から見る、表現と社会」

日本中世における顔を隠す表現とその意味  
—絵巻を素材として—

東京大学大学院人文社会系研究科  
高岸 輝

なぜ顔に注目するのか？

- ① 絵師や仏師など、絵画や彫刻の作り手の個性が最もよく表れる→**様式**
- ② 人間や神仏などを造形化する際、作り手やそれを取り巻く社会が共有している約束事を知るため→**図像・形式・型**
- ③ 作品が作られた地域・時代の社会の中で、人間がどのような営みを行ってきたかを知る  
→**民俗学・社会史・絵画史料**

① 様式比較で顔に注目する試み

- 人文学オープン共同利用センターの顔貌コレクション (**顔コレ**)
- <http://codh.rois.ac.jp/face/>
- IIIF規格の絵巻・絵入り本などから顔を切り出し、比較する




2. 顔貌リスト「顔コレ」は、同一作品内の顔の顔に注目して、絵師や工原の分身や種類などを検出できる例です。下記で示すように、慶應義塾大学所蔵の『源氏物語』では、人物の顔が明確なシーンと、背景には力が入っているものの人物表現はやや曖昧なシーンが混在しています。これは顔貌を抽出した絵巻・工原の分身検出、または顔貌の制作年代の違いを検出するためにポイントとなる情報です。



② 図像・形式・型、③ 民俗学・社会史・絵画史料

- 日本の中世絵巻のなかには、「顔を隠す」表現が散見される。これらは二種に分類できる。
- 神や天皇などの高貴な存在に対し「顔を描くことをはばかったもの」→絵画において神聖性を表現する際の約束事・・・②
- 僧兵（大衆）や病者などの「覆面姿を描いたもの」→階層・身分や差別の意識を示す・・・③

以下では、まず③の「描かれた対象」に注目し、そのあと②の「描く行為」を分析する。

1 顔を隠す人々

渋沢敬三編著  
『絵巻物による日本常民生活絵引』（平凡社）  
（初版）1964～68年  
（新版）1984年

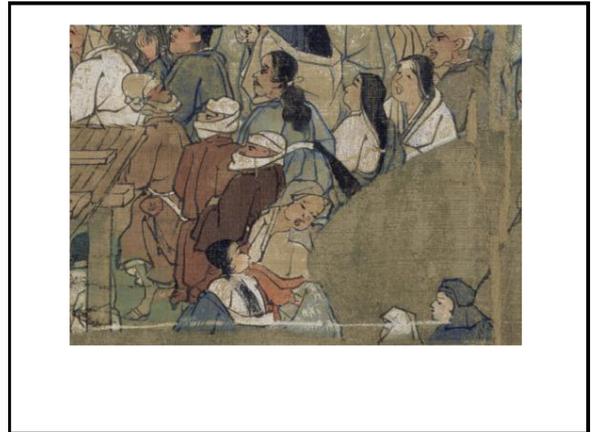


民俗学者・渋沢敬三（渋沢栄一の孫、1896～1963）が、中世絵巻に描かれた「民俗的事象」を抽出し、分類しつつその解説を付したもの。  
絵巻に描かれた事物にタグをつける手法。



「春日権現験記絵巻」

「上右図は女が覆面頭巾をしている。僧兵すなわち衆徒に見られる服装なのであるが、女はこのような支度をすれば男のみの世界へも紛れ込むことができたように、『法然上人絵伝』のなかにも僧兵のなかに女の混じっているさまが描かれている」



網野善彦『異形の王権』  
(平凡社、1986年)



- 「異類」→「異類異形」はもともと妖怪、鬼、鬼神など
- 鎌倉時代以降→人間の服装や姿態などについて、否定的、差別的な意味
- 「決してこれを直ちに差別された人々とはいい難く、むしろ畏れ、畏敬の念をもって見られる場合すら見いだされる」
- 覆面・裏頭(かとう)が「異類異形」と呼ばれた例

網野善彦『異形の王権』  
(平凡社、1986年)

- 「或は衣を被らしめ、或は太刀を持ち、或は直垂小袴を着し、社頭並びに寺辺を遊行せしむる神人等・・・」(『春日社記録』一、1237年)
- 「面を隠し容(かたち)を改む異類の輩、社辺を横行するを停止す」(『石清水文書之一』、1285年)
- 「覆面・裏頭で杖をつく姿が、興福寺・延暦寺などの衆徒の大衆會議に当っての衣装であり、この作法は『たとえそれが天皇の命令であっても、頭をむきだしにし、顔をあきらかにして評議することはできない』(勝俣鎮夫)性質のもの」





「遊行人縁起繪巻」(清浄光寺蔵、14世紀)第5巻 他阿の一行、源河する。



「遊行人縁起繪巻」(清浄光寺蔵、14世紀)



「遊行人縁起繪巻」(清浄光寺蔵、14世紀)

### 網野善彦『異形の王権』

- 「扇の骨の間から見る」
- 大道や河原、寺院や道場の周辺など、いわば「公界(くがい)」の場でおこった異常な事態を見なくてはならない場合、あるいはそれを意識的に見ようとする場合のしぐさ
- 南北朝初頭、中原師守は六角堂や祇園社などの寺社に参詣するときや、説教、平家物語を聞くときなど、(中略)まず間違いなく覆面と推定される「異形(いぎょう)」の姿をして出かけている

### 網野善彦『異形の王権』

- 扇で顔をかくし、骨の間から見るのも、まさしく一時的な覆面と考えることができる。「公界」の場で、突発的におこった出来事、突如としてその場の状況を一変させるような事件を見なくてはならない状況に遭遇したとき、あるいはすでに予想されるそうした事態に自ら加わるさい、手に持った扇で面をかくし、人ならぬ存在に自分をかえる意味を、このしぐさは持っていたのではなかろうか。
- 室町時代以降は次第に行われなくなる。



「一嘉聖絵」(清浄光寺蔵、1299年)



「一嘉聖絵」(清浄光寺蔵、1299年)

## 2 顔を隠す表現

山本陽子  
『絵巻における神と天皇の表現』  
(中央公論美術出版、2005年)



- ・「尊いものの姿を造形しない禁忌」  
→偶像崇拜の禁忌（ユダヤ教、イスラム教、キリスト教、仏教）  
→明治天皇の肖像に関わる議論  
→増野恵子「聖と俗の天皇肖像—明治天皇「御写真」と非公式肖像」〈『天皇の美術史』6、吉川弘文館、2017年）

山本陽子  
『絵巻における神と天皇の表現』  
(中央公論美術出版、2005年)

- ・顔を描かない理由
  - ①呪詛に悪用されることを防ぐ（赤松俊秀）
  - ②あからさまに描かれることに対する嫌悪感（米倉迪夫）
  - ③高位者を描くことへの「はばかり」（梅津次郎）

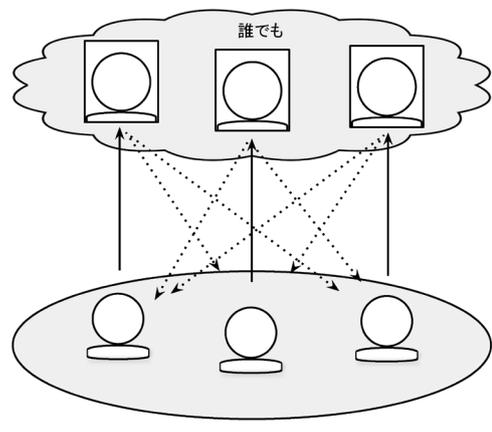
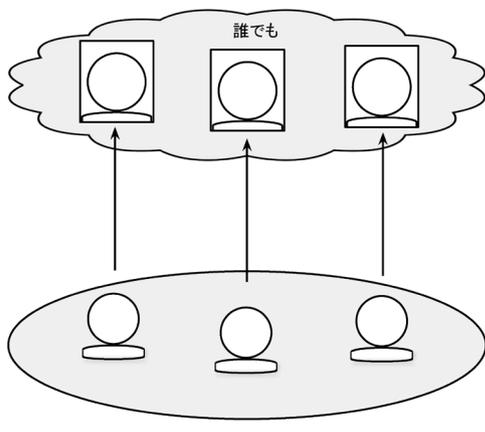
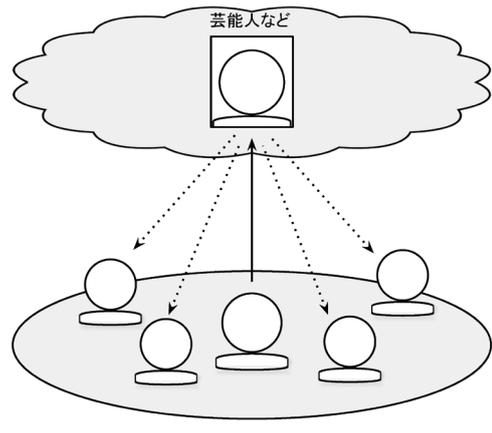
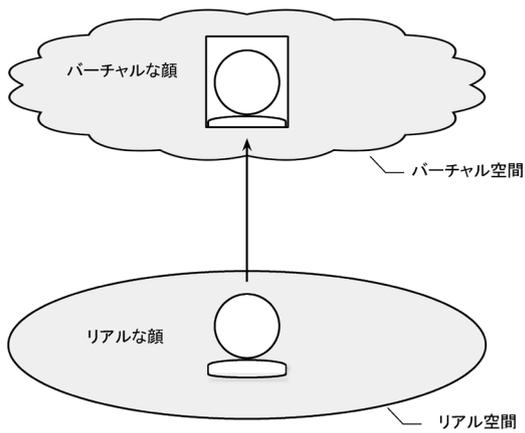
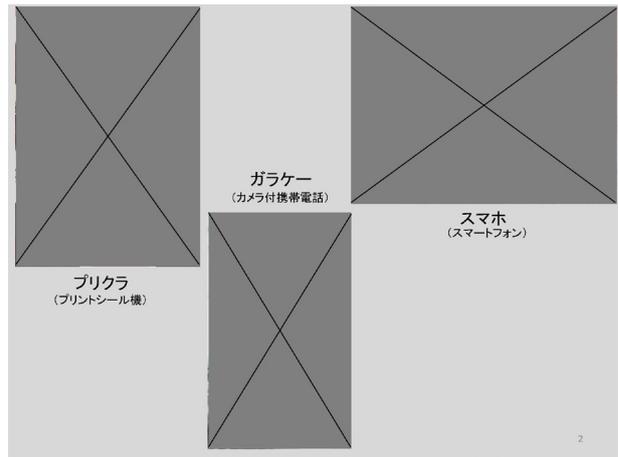
山本陽子  
『絵巻における神と天皇の表現』  
(中央公論美術出版、2005年)

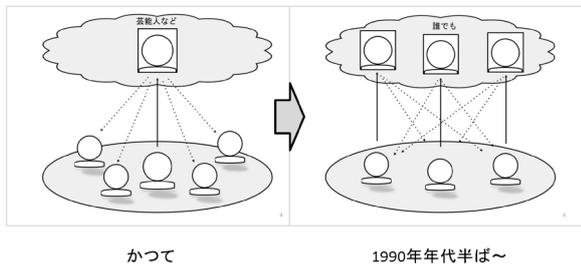
- ・「貴人の顔を隠す理由は絶対的なものではなく、地位に関わる相対的なものと推定」
- ・「身分の低い者ほど具体的に、高位の者ほど抽象的な顔に表される」
- ・天皇の顔→抽象の極致

3 議論に向けて  
(論点1) 単数性(個)と複数性(集団)  
(論点2) 具象性と抽象性

3 議論に向けて  
(論点1) 単数性と複数性→覆面する「人々」  
(論点2) 具象性と抽象性

付録4 久保先生ご講演スライド資料

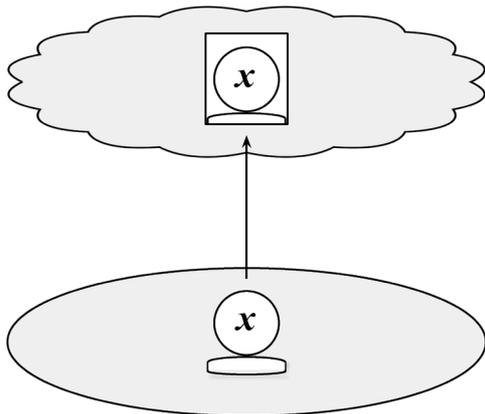
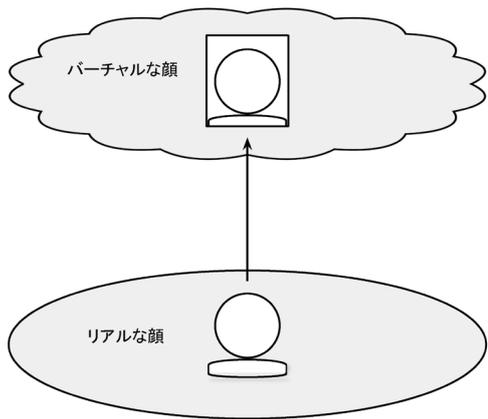




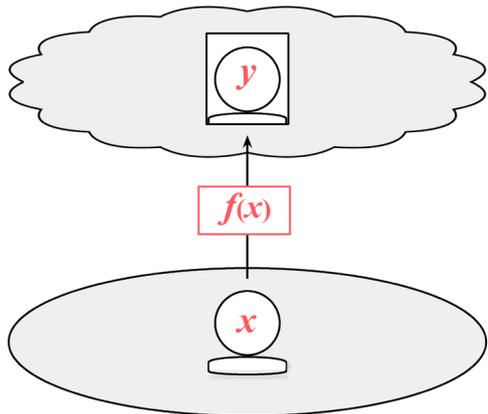
かつて

1990年代半ば〜

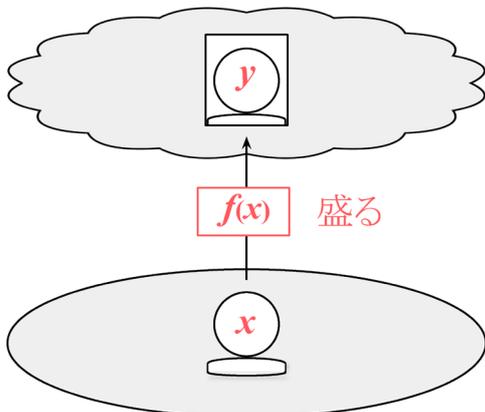
7



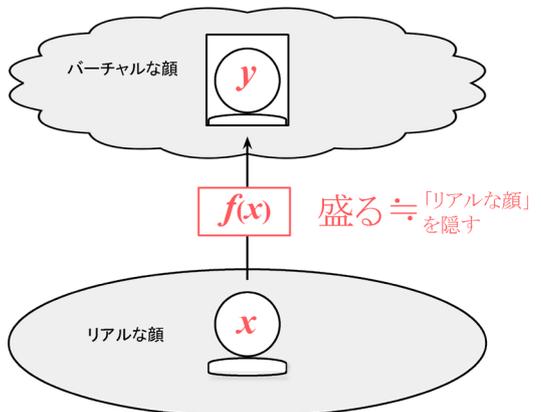
9



10

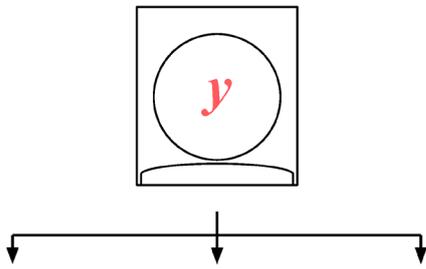


11



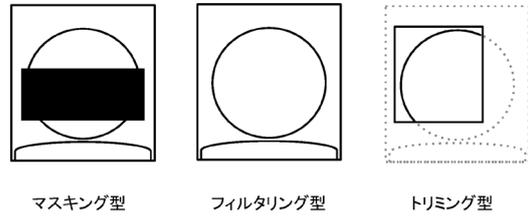
12

「リアルな顔」の隠し方



13

「リアルな顔」の隠し方



マスクング型

フィルタリング型

トリミング型

14

	マスクング型	フィルタリング型	トリミング型
バーチャルな手段	 例) イラスト合成	 例) 色調加工	 例) トリミング
リアルな手段	 例) マスク、サングラス	 例) 化粧、照明効果	 例) クローズアップ

15

	マスクング型	フィルタリング型	トリミング型
バーチャルな手段	 例) イラスト合成	 例) 色調加工	 例) トリミング
リアルな手段	 例) マスク、サングラス	 例) 化粧	 例) クローズアップ

16

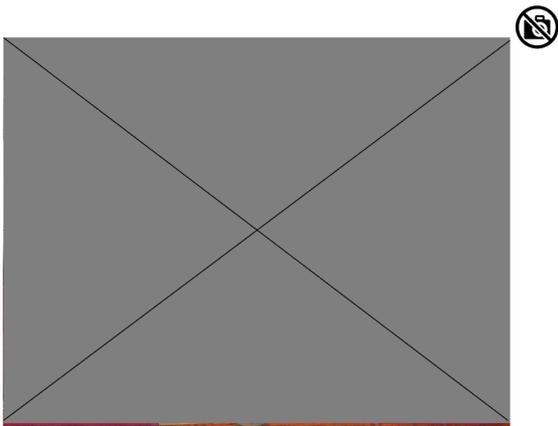
1990年代半ば～

17



『プリント倶楽部』(1995)

特許庁ホームページより引用 ([https://www.jpo.go.jp/news/koho/kohoshi/vol47/07\\_page1.html](https://www.jpo.go.jp/news/koho/kohoshi/vol47/07_page1.html))



プリ帳 (1995年)



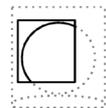
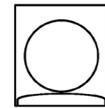
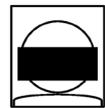
オムロン『アートマジック』(1998)



オムロン『ハイキーショット』(1999)<sub>20</sub>



日立ソフトウェアエンジニアリング『劇的美写』(2001年)



21

23



2000年代半ば〜

26



『J-SH04』(2000)

SHARPホームページより引用

2010年代半ば～

32



初代 iPhone(2007 日本では2008)



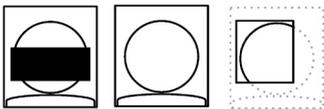
iPhone4 (2010年)

34



インスタグラム普及 (2015頃)

35



<https://mery.jp/1098694>

	メディア環境	盛りの対象
第I期 1995年頃～	 フリクラ      フリ帳	 顔
第II期 2005年頃～	インターネット  ガラケー      ケータブログ	 目
第III期 2015年頃～	 スマホ      インスタグラム	 シーン ライフスタイル

40

なぜ顔を隠すのか？

41

なぜ「盛る」のか？

42

「自分らしくあるため」

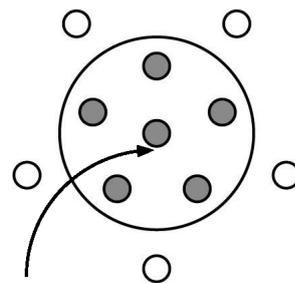
43

「自分らしさ」？

44

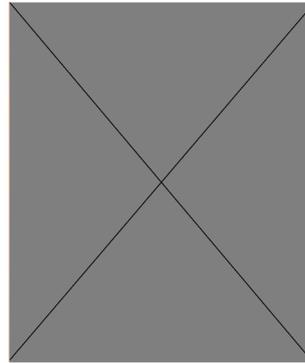
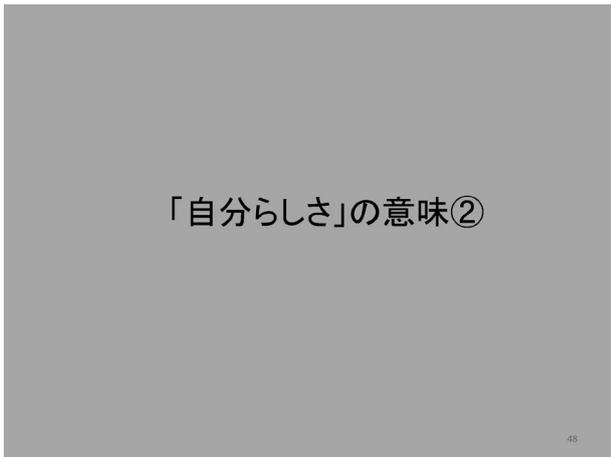
「自分らしさ」の意味①

45

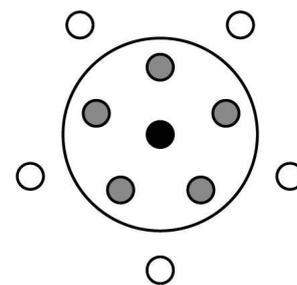


他の集団ではない、この集団を選ぶ「自分らしさ」

47

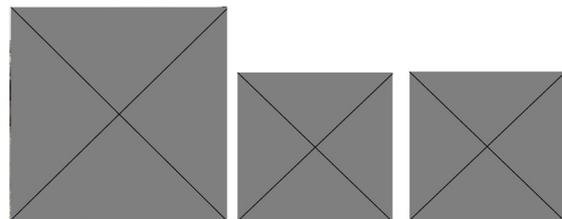


「すっぴん褒められてもうれしくない、化粧を褒められたい」

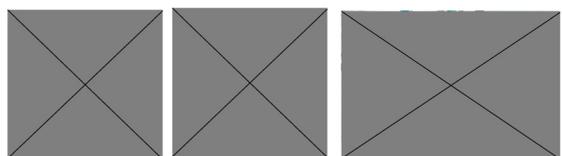


集団内の他の人に対する「自分らしさ」

51

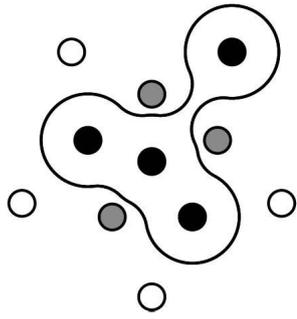


Instagram @mei\_tnk より転載



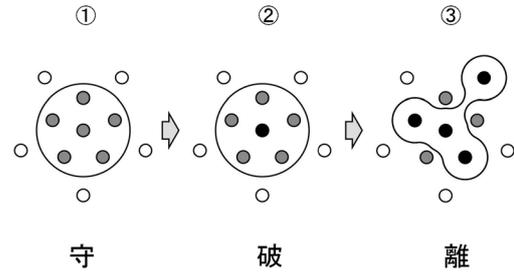
「真似されたい」

53



他の人ではない、自分を真似する集団ができる「自分らしさ」

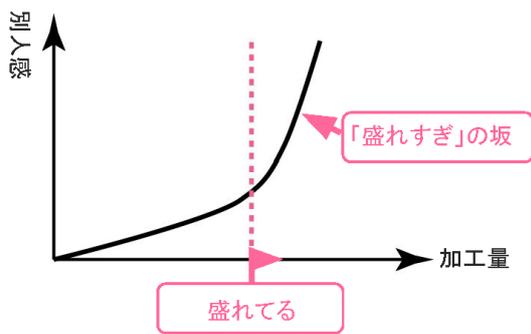
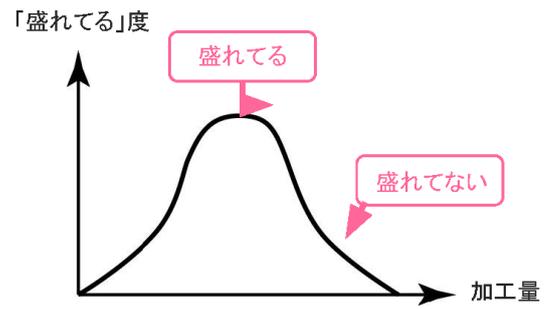
54



55

どう顔を隠すのか？

56



## 付録5 来場者アンケート

1. あなたご自身について、差し支えない範囲でお答えください
  - 1-1. 年齢（単数選択） 20歳未満・20代・30代・40代・50代・60代
  - 1-2. 性別（単数選択） 男性・女性
  - 1-3. 職業（単数選択） 学生（大学院生含む）・大学教員・団体職員・自営業・会社員・公務員
  
2. 本フォーラムにご参加いただいたきっかけ等についてお答えください
  - 2-1. 本フォーラムをどのように知りましたか。（複数回答可）
    - 東京大学文学部・人文社会系研究科 HP
    - 文化資源学研究室 HP
    - メーリングリスト（文化資源学会）
    - メーリングリスト（日本顔学会）
    - 知人の紹介
    - その他
  
  - 2-2. このフォーラムに参加しようと思った理由はどれですか。（複数回答可）
    - テーマが面白いと思ったから
    - 中世の絵画に興味があるから
    - 高岸先生の講演を聴きたいから
    - 現代日本の若者の「盛り（もり）」に興味があるから
    - 久保友香先生の講演を聴きたいから
    - 文化資源学研究室に興味があるから
  
3. フォーラムの内容に関してお答えください。 満足度1（低い）～5（高い）の5段階から選択
  - 3-1. 「顔を隠す」というテーマで行われた今回のフォーラム全体の内容について、どのくらい満足されましたか。
  
  - 3-2. 学生による企画趣旨説明について、どのくらい満足されましたか。
  
  - 3-3. 高岸輝氏講演「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」について、どのくらい満足されましたか。
  
  - 3-4. 久保友香氏講演「現代日本の若者たちの『顔を隠す』顔画像コミュニケーション」について、どのくらい満足されましたか。
  
  - 3-5. ディスカッションについて、どのくらい満足されましたか。
  
4. フォーラムの運営について  
オンラインでの開催にはどのくらい満足されましたか。
  
5. フォーラム全体について  
フォーラム全体を通してのご感想、ご意見がございましたらご記入ください。



第 21 回 文化資源学フォーラム実施報告書  
顔を隠す—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会

---

発行日 2022 年 4 月 30 日

発 行 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室

発行者 「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生

---

※ 本書の無断複写、複製、データ配信はかたくお断りいたします。